

(表紙)

(異筆)
「海舟日記1」

(異筆)
「前世界
五号」

(ラベル)

(ラベル)
「海舟日記／第五号」



(朱書 異筆)
「第五号 從慶応元丑九月
(ママ)

到同二寅二月」

慶応元年乙丑 從
九月 二 (欠損)
寅 (ママ) 正月

慶応元乙丑

九月朔日

二日

三日

四日

越⁽¹⁾青山小三郎来る、聞く、長州静穩、国説に云、

御征伐之名恐らく当らざらん歟、京師江対せし罰は

既に三家老を誅して奉謝せり、其後右御所置⁽²⁾「^(虫損)

又改めて此度之^(虫損)」

五日

近日、永井主水・戸川鉾三・大久保一翁など

召ありと、一翁は「^(虫損)」云

六日 大坂江英船入津、風説には長州御^(虫損)^(征討力)

七日 其名なし杯云と、聞く、外国奉行⁽⁵⁾兩人急

出立と云

奥平⁽⁶⁾沓岐来る

九日 外国奉行二人、急速大坂江出立命せられしを聞く

十日

十三日頃、英仏蘭の軍艦大坂江廻り、開港を乞ふ

(1) 越前藩士

(2) 益田右衛門介・福原越後・国司信濃

(3) 永井尚志(大目付)

(4) 戸川安愛(目付)

(5) 山口直毅(外国奉行)と小笠原長功(目付)

(6) 豊前中津藩もと家老

の説紛々

十一日 聞く、当月廿七日迄に長州より名代被差出

十二日

十三日 さる時は、弥御 征討御決定二付、鎮西の諸

侯国許二勢を揃置可申旨御達ありと

十四日

黒田嘉右衛門・柴山良助来る、聞く、英仏蘭の軍

艦八隻、大坂江向け出帆すと、其所置如何□

不可知、彼絶て「⁽⁹⁾虫損 人に話せずカ」⁽¹⁰⁾と云

尾玄同公御先手□免、已前⁽¹¹⁾之老公又々被仰付

ありと、井伊家御□手被命、三万石御加増ありしと云

十五日 当月四日、小笠⁽¹²⁾「⁽¹³⁾虫損 原老岐守殿カ」閣老並之命あり

十六日

十七日 ○奥平清記来る

十九日

(7) 黒田清綱(薩摩藩士)

(8) 薩摩藩士

(9) 「海舟日記抄」により推定(以下、虫損部分で補記のあるものは同断)

(10) 徳川茂徳(尾張藩前藩主)

(11) 徳川慶勝(尾張藩前々藩主)

(12) 小笠原長行(老中格 肥前唐津藩世子)

(13) 伊予松山藩家老

廿日 ○

松平上総介来る、聞、稲葉兵部少輔当月朔日御用召之所
御断ありしと云

廿一日

芸州飯田旗之助来る、今日国許の船出帆之由

廿二日

中村敬輔来る、白戸石介・岡田政吉来る

廿三日

廿四日 水野彦三郎来る

廿五日

(付箋)
「廿五日条全」

堀直太郎来、明後日頃京都江出立之旨聞く、

公方様十五日大坂御出立「(虫損 御上力)」京、長州之御所置

御申上と云、外国人関白殿下江参上いたすべく旨

申出、御役人二は話さず、重実大之事件話も無益なりと

唐津侯御出、御逢接「(虫損 ありし力)」と云、事情いまた詳

(1) 松平忠敏(もと講武所師範役)
(2) 稲葉正巳(もと若年寄 安房館山藩前藩主)

(3) 中村正直、号敬宇(儒者)

(4) 小普請組

(5) 尾張藩士

(6) 薩摩藩士

(7) 徳川家茂

(8) 二条斉敬

(9) 小笠原長行

十

ならず長州は吉川并毛利淡路之家老〔虫損 何分力〕

当人罷出難く義申上として出坂之所、行違本家

家老御召二相成、空敷帰国と云、尤皆芸州家

之取扱也と云、当廿七日迄二家老上坂なき時

は、即刻御征討之旨、諸家被仰出と

廿六日

廿七日

廿八日

岡野平次郎来る〔12〕

廿九日

九月朔日

二日

三日

四日 甲賀源吾来る〔13〕

越侯より賜あり〔虫損〕「郎使として来る、聞く、大

(9) 吉川経幹(周防岩国藩主)

(10) 毛利元蕃(周防徳山藩主)

(11) 吉川采女(岩国藩家老)と福岡式部(徳山藩家老)

(12) 小姓組 岡野孫一郎子息

(13) 軍艦組

坂英之軍艦長滞留之積りにや、諸道具多く持

参すと

公方様、十七日 御参内「^(カ)」^(欠)にや、御下賜真の御太刀

御陣羽織御拝領、弥御征討御決議、然れとも^(出損)□

家并御供は甚寛々たりと云

五日

大久保一翁、大坂江被 召、急に出立と云

六日

七日

八日

九日

堀直次郎来る、今日早にて出立、京摂之間穩なりと聞^{らす}く

大久保一翁出立見合候様被仰渡

近々還御之御沙汰興りたりと聞く、何等の御事哉、更に詳

説なし、唯玄同殿・一橋公御乗切りにて、京摂御周旋

且云、兼々申上
置候御差立之事

あらハ、留守方江申
残候故、いつにても

被御申遣候様云々と云

之風聞ありと云

十日

大久保一翁来る、出^(虫損 立力)見^(虫損 合 昨日力)「布衣已上惣出仕あり

上様大坂表御発途、伏見御一泊、京師江被仰上

あり、当今之形勢御^(虫損 力力)□二不被為及、依之一橋公江御務^(虫損 置力)職

御譲遊ハレ候趣被仰上^(虫損 置力)□、還御之御決議なりしか、

再ひ二条江御入城と云

松前并白川官位被召放、在所江蟄居、御沙汰可⁽¹⁾

相待旨、御所より被仰出あり、是は外国人江大坂

開港之定約書御渡之事ありし故と云、又外国人

三人大坂にて殺さるゝ風聞あり、且開港は十ヶ月

延月承引歟と云説あり、京摂之間紛擾、

此地にては薩州より讒せしと云説専ら也

青山小三郎来

十一日

(付箋貼付)

十五日 田村⁽³⁾肥後守より到来

方今内外

御事多之折

柄

震襟を不奉

(1) 松前崇広(松前藩主 十月朔日老中を罷免される)
(2) 阿部正外(陸奥白河藩主 十月朔日老中を罷免される)

(3) 田村直廉(徒頭)

安御次第柄二も
是あり、

御職掌おゐて
(天カ)

御痛心之余り

御胸痛御鬱閉

被為在、就而ハ

一橋中納言殿

永く京師に

被在之、事務

二も被相通候

儀二付、中納言殿

御相統御政務

御讓被遊度

旨、

御所江御願置

被為在候、此段

内意申達

候様との

御沙汰二候事

十月

今度

御所江被

仰上候趣も有之

候二付、去ル三日

大坂表

十二日

此夕、妻木江家来差出、御書取渡有之、但追々順達と云

説あり、云

慶応癸丑十月八日、友人閑居を訪ふ、近日都下之風聞

喋々重大之御事を聞く、当時之世評悉く信しか
(虫損 たくカ)

半は疑ひ半は驚く、
(虫損 忽ち十二日カ)「出のこと扱ふ方にて

御達あり、初て驚き、また疑ふ、如斯重大の御事あらむ

に、其際よつて来る因なからんや、又上下尽力極まつ

て後如此なるへし、近世頃都下「
(虫損 ことカ)」更に無事、頗る泰平

といふ者十にして八・九、京摂之間また然りと、敢て其
(虫損 他のカ)

御議あるや、聞ける所にあらず、卒然として此達あるか

如き、尤以て恐怖にたへず、怪哉、浮末の風言路の壅

塞此極に到れるや、小賤吾人之輩いふに足らざるも、

また永世の鴻恩孰か厚く孰か薄きや、言行ハれす

(1) 妻木頼欽(寄合
肝煎)

(2) 一橋慶喜(禁裏
守衛総督)

御発途、先伏

見江被為入

御泊、夫より東

海道還御

可被遊旨被

仰出、猶又

還御之儀

は御沙汰止、

伏見江御滞

留可被遊旨

被 仰出、大坂

御城

出御、陸路被

為成、伏見

奉行御役宅

江着御被遊、

同四日御同所

御発途、

御上洛可被

遊旨被

仰出候事

此頃一橋公

御昇進被

蒙仰候事あり、

又長防之御所置

一応評義候様

して蟄す者皆悉く不忠ならんや、国を誤ち家を誤

つ、 君上をして此極に到らしむ、豈忠といふへけ

む哉、古人云く、蓋棺是非定ると、いふ所^今にあらざる也、

御書取を拝すに及びて、涕泣していふ所を知らず、遺

恨胸間に充塞し、号哭するに堪へず、後焦慮すること

再三に及びて、活として通する所あり、

英意を奉して思ハす大息す、嗚呼、区内之紛擾

今に五・六年、下民といへ共未たかつて

君上を私議せず、うへなる哉、 上意之至誠^(虫損 其力)

下に貫徹するの爰に到^(虫損 れるを力)、「中雲公明を覆ひ隔

絶甚たしといへ共、また言外微妙之ものあり、識者は必らず

默察せむ、いかんそ人心の靈応、不言の感通なからん哉、

夫栄恥富貴は上下一^(虫損 徹 元よ力)「^所り人心の固執する也

況哉天下之威福に於けるをや、是を顧ミ給ハさる^(虫損 草鞋力)「

のことく、唯 英旨の在る所、邦家の安危に在る而已、

御所より被
仰出ありしと
承る

あわれ臣子たる者此 英心のことく万分一を

奉伺せは、何そ 御憂苦をして此極に到らしめむ哉、

若能く如此ならば、中興の大業日を出てすして

成るへく、孰か叛き孰か捨てむ、嗚呼、痛しきかな、

能く爰に及ハさること、また恨らむ、此後益迷雲中

間に集塞し 上意も終に明燭を失なハむ、小臣

一度はかなしみ、一度は感す、更に其中遺恨なきこと

能ハす、独り希ふ所は補翼誠正に出て、沢区内

に被らむことを、今感慨の余、憤激して記せさること

を得す 乙丑十月十二日夜 臣義邦

十三日 対州侯より直書到来、大島友之允より書通
十四日

有之

白戸石介来る

門生調所より得^(虫損 来力)る御建白書二云

- (1) 宗義達
(2) 対馬藩士
(3) 小普請組

諸家三十幾家
之留守居并周
旋方といふ者被
召出、貿易之可
否御下問、
兩親王家御随見、
一橋殿・会津・
桑名・唐津
其他役々出席、
唐津侯推問
ありしと云

或は聞く、此
御書取尾張
玄同公大坂より
上京御持参、
関白殿江御
指出あられし
と云

慶応元年十月十四日

臣家茂幼弱不才之身ヲ以て、是迄叨りに征夷之大任を
蒙り、乍不及日夜勉強罷在候所、内外事多之時二膺り
上宸襟を安し奉り、下万民を鎮むる事不能、加之国
を富し兵を強して 皇威を海外二輝し候力無之、
竟に職掌を汚し可申と、痛心之余り胸痛強く鬱閉
罷在候所、臣家族之内二而慶喜義は年来

闕下に罷在、時務二通達仕、大任二堪可申と奉存候二付、

臣家茂時之如く諸事委任被成置候様偏二奉願上候、

尤当今時勢之義二付ては、如別紙 奏聞仕候間、右

慶喜江御沙汰被下候様奉願置候

御別紙

臣家茂謹而宇内之形勢を熟考仕候所、近来追々変
遷致し、和親を結ひ有無を通し、互に富強を計候風
習に推移候へは、是迄天地自然之氣数不得止之姿二可
有之奉存候、就而は 皇国二限り一向御外交不被為有候

(3) 中川宮朝彦親
王と山階宮晃親王

(4) 一橋慶喜

(5) 松平容保(京都
守護職 会津藩主)

(6) 松平定敬(京都
所司代 桑名藩主)

(7) 小笠原長行

(8) 徳川茂徳(尾張
藩前藩主)

(9) 二条斉敬

ては卓怯退縮之姿に相成、御国体御国威都而^{〔虫損 相立力〕}□□

申間敷、既に先年於下田亜米利加使節と和親条約

為取替相成候も、右等斟酌之上、遂

奏聞、御許容相成候義にて、已来鎖国之旧格を變し、

富強之基漸々相開候所、其^{〔虫損 後力〕}□外交拒絕之義被

仰出候二付、可成丈 聖諭遵奉仕度心願^{〔虫損 二御座力〕}」

候得共、無謀之掃掃^{〔ママ〕}は致間敷旨被 仰出候趣も有之

候間、何にも富国強兵之策相立候上ならては膺徴^{〔徴〕}之

典難被相行、就而は彼の所長を探り、貿易之利を以

多く艦礮を設備、以夷制夷之術を講し候方、方今

之專一之急務と奉存候、是迄種々苦心罷在候折柄、

防長之事件相起り、終には大坂城まで出張仕候処

折柄所、不計夷舶兵庫港江渡来、条約廉々定而^改

勅許有之候様申立、若臣家茂ニおゐて取計兼候ハ、彼

闕所江直に可申立旨申張、種々論議を尽し応接仕

候得共、何分承諾不仕、去とて無謀之干戈を動し候ては

必勝之利無覺束、仮令一時は勝算有之候とて、四方環海

之御国 東西南北旦暮攻掠を受候ては、戦争

無已時、皇国生民靡爛此時より始り可申、不仁不(虫損 怒力)□

此上は有之間敷、誠二以歎敷、臣家茂一家之存亡は暫く指置、

宝祚之御安危二も関係仕、実以不容易義二付、

陛下万民を覆育被遊(虫損 候力)□御仁徳二相障り可申義、臣家茂二

おゐて職掌相立不申候間、此等(虫損 之力)□所篤と

思召被為分、乍恐 御動揺無之、断然御卓識(虫損 被為力)□□

有、何卒改而条約二付、去虚存実至当之談判仕候義

勅許被成下候様仕度、左候へは如何様二も尽力、外夷制馭之

実備を相立、内は防長追討之功を遂、上

宸襟を奉安、下万民安堵せしめ、臣家茂祖先之志に

報ひ可申志願二御座候、皇国如何様英武之御国

柄に候とも、万一内乱外冠(寇力)一時二指湊ひ、西洋万国を敵に

引受候ては、終には 聖体御安危ニも拘り、万民塗炭

ニ陥り候は必然之義と、誠ニ以而痛哭慨歎之極り、仮りにも

護国安民之任を荷ひ候職掌ニおゐては、如何様御沙汰御座

候とも、施行仕候義何分にも難忍奉存候、依之、前文申上候通、

勅許之御沙汰被成下候ハ、百万 宝祚之無究万民之^(マヤ)

大幸無此上、千々万々乍恐願上候、まことに不堪悲歎、号泣之

至ニ奉存候、尤外夷 闕下江罷出候様相成候ては、深く恐入候

義ニ付、精々尽力遂談判、^(虫損 七日迄力)「兵庫港ニ為指扣候間、成

丈ヶ早々御沙汰被成下候様仕度、此段奉

奏聞候

十五日 此頃都下之風聞大低^(虫損 猜忌カ)□□而已、一橋公を疑ひ、甚敷は

既ニ御暗殺に御逢成されし、或は内官又小笠原⁽²⁾□□^(虫損)

暗殺申せしと云者十にして八・九、可歎、都人之愚なる

又云、此度之反問は薩州より 御所に内答せり忤也

△⁽¹⁾

従前之非を改、
日新之徳を修メ
去浮虚督質
実、政道確然と
相立、上安
宸襟、下保万民
候様、乍不及勉
勵可仕奉存候、
依之謹而御請
奉申上候

(1) 次頁上欄最終
行の△から続くこと
を指示したもののか

(2) 小笠原長行(老
中肥前唐津藩世子)

本日肝前大久保金四郎方にて御達あり、御書付写

方今内外多事之時、御職掌難被為立

思召、且近来御胸痛御鬱閉被為在候二付、

御退隠被遊旨 御所江御願置被為在候処、難被及

御沙汰段被 仰出候、素より御決心之儀二付、再応

御願可被仰立候得共、猶再三再四

御熟考被為在候処、格別 御寵命ヲ以被

仰出候二付、御感激之余り諸事 御奮発

御勉強被遊、是迄之通 御政務御掌握可被遊

旨 御請被仰上候、此段相達候様二との

御意之事

○条約之儀二付

(虫損 写力)
勅諭□為心得相達候事

条約之儀

御許容被為在候間、至当之処置可致事

家茂江

(3) 寄合肝煎

臣家茂幼弱
不才之身を以大
任を蒙り、内外
多事之時二膺り、
職掌を汚シ
可申、且近来胸
痛鬱閉之症
相発し、難堪大任
奉存候処より、
叡慮之程をも
不顧、退隠之願
書差出候処、難
被及 御沙汰被
仰出、何共当惑
仕候、素より決心仕候
儀今更難念止、
再願仕度奉存候
得共、猶再三再四
熟考仕候処、是
迄之不行届ハ
御咎無之、加之難
被及御沙汰との
寵命を蒙り、
感激之余り病
を推而出勤仕候

△

別紙之通被

仰出候二付而八、

是迄之条約面所々

不都合之廉有之、

不応

叡慮候二付、新に

取替窺可申、

諸藩衆評之上

御取極可相成事

○此御書付は江戸

にて御布告なし

（付箋）

「十八日条三行抄」

十七日

石川周二・花源次郎来る

十八日 去ル十日、一橋中納言様御政務御補翼之儀被

仰出、松平肥後守御政事向十分見込取計候様

被 仰出候、唐津之世子閑老被 仰付

廿日 松前伊豆東着之由を聞く

細川留守居江慎介貰受之事談遣す ○対州侯江

返書出たす ○佐藤・安井・大島江一封出たす

廿一日

廿二日

廿三日 京師御混雑、御役人廿人程退職の風聞を聞く

廿四日

廿五日

下御勘定所江小普請上納金証文下案為受取、家来出ス

（1）この注記は、前ページ本文「○条約之儀」に対応する

（2）石川惟治（もと富士見宝蔵番頭）

（3）花井源次郎（幕臣嗣子 慶応二年家督）か

（4）松平容保

（5）小笠原長行（十月九日老中となる）

（6）松前崇広（松前藩主）

（7）馬淵慎助

（8）佐藤与之助（軍艦組 海舟門下）

（9）安井九兵衛（大坂町方南組惣年寄）

（10）大島友之允（対馬藩士）

廿六日

(11) 芸州侯袴地至□
より(虫損 来カ)

廿七日

廿八日

杉浦清助来る

廿九日

今朝御裏印済
(12) 内田名代 (13) 丹波殿

晦日

聞く、当廿二日板倉周防殿(14)
当時伊賀守閣老被

命と云 ○蔵宿江御裏印済
証文遣す

(15) 松平上総介来る

十一月朔日

(16) 奥平沓岐来る、
(17) 岩尾内蔵允来る

二日

小普請金沓両下御勘定所江差出す
黒水泉次郎来る

十二月・正月之御扶持方下案持参

(11) 浅野茂長

(12) 内田直之丞(軍艦組)

(13) 平岡道弘(若年寄)

(14) 板倉勝静(備中松山藩主 十月二十二日老中再勤)

(15) 松平忠敏(もと講武所師範役)

(16) 豊前中津藩もと家老

(17) 岩男俊貞(肥後藩士 海舟門下)

三日

四日 高橋嘉兵衛来る

蔵宿より、明日天気次第玉落知らせ来る

五日

嘉兵衛安蓮社方江、龍雲世話いたし呉候礼申遣す

六日

玉落入米十二俵溜り御扶持六俵来る

岡野より文通、龍雲子先方より断之趣申越

七日

窪橋江七円用立

荻野小四郎来る、国許江十一日急出立之趣申聞ける

島津文三郎来る、高橋来る、龍雲事今一応先方聞合

趣申聞ける

八日

九日

蔵宿より玉落二付、拾七両三步来る

十日

(1) 越前藩士

(2) 軍艦組

奥平井内藤仲・松平上総介来る、聞く、当月三日

御下坂、去月廿七日御参内ありしと云、又当五日頃、永井⁽³⁾・戸川⁽⁴⁾

之両氏芸州江発足、長州逢対と云

十一日

松平伯州家来一人入門、入塾を乞ふ

但先日一人入門
右之者□□入塾

鈴藤勇次郎来る、操練局寥々皆引込思案而已と云

木下は万事私営、唯貨殖而已と

十二日

堀直京師より帰り候趣にて来る、小松⁽⁹⁾より来翰、奥平之

事承知之由返事有之

十三日

奥平老岐江文通、同人来訪

十四日 有泉敬之丞来る

⁽¹⁰⁾大久保、一昨日又々大坂江出立
之様被仰渡之所、不快二付
御断之趣、書通有之

(3) 永井尚志(大目付)

(4) 戸川安愛(目付)

(5) 松平(本庄)宗秀(老中 丹後宮津藩主)

(6) 軍艦頭取

(7) 木下利義(軍艦奉行)

(8) 堀直太郎(薩摩藩士)

(9) 小松带刀(薩摩藩家老)

(10) 大久保一翁

十五日 鈴藤⁽¹⁾勇次郎来る

十六日

杉田⁽²⁾盛来る、有泉敬之丞来る、同人江託し伊藤⁽³⁾

江一封遣す

十七日 近日大老御役御免之風聞あり、和泉殿・
十八日 飛弾殿風聞甚悪敷と云

飛弾殿又退職と云

堀来る、聞く、京師にて伯耆殿薩家老小松・大久保被

呼出 仰を伝て云、薩家は 広大院様并

天璋院様御縁辺も有之、上にも厚く頼被思召

候、世上浮説彼是申候とも、少の御掛念無之候間、猶又

一統厚心得、御為筋之事は、万事被申上可申旨

御達有之と云、又聞、近内伯州含命東下と云

十九日 沢栄左衛門来る

廿日 此頃松平周防殿老中、稻葉⁽¹⁰⁾兵部殿参

廿一日 政被 仰付たりと ○浅布より返金あり

付箋貼付

(1) 「鈴藤」の右に、
自筆で傍線が引かれ
ている

(2) 杉田玄端子息

(3) 伊藤左源太(書
院番士)

(4) 酒井忠績(播磨
姫路藩主 十一月十
五日大老罷免)

(5) 酒井忠毗(越前
敦賀藩主 十一月十
七日若年寄罷免)

(6) 水野忠精(老中
出羽山形藩主)

(7) 大久保一蔵(の
ち利通 薩摩藩側
役)

(8) 十一代將軍家
斉正室 島津重豪女

(9) 十三代將軍家
定正室 島津忠剛女

(10) 松平康英(康直
十一月二十日老中再
勤 陸奥棚倉藩主)

(11) 稻葉正巳(十一
月二十日若年寄再勤
安房館山藩前藩主)

廿二日

白井宗民来る⁽¹²⁾

廿三日 初雪微

奥平より返金あり、薩州江文通頼ミ来る

廿四日 此頃、閣参之黜陟與らむとするの説紛々

廿五日 松岡孫三郎退塾、桑名表江引取、京師江出ると云

伊藤左源太来る⁽¹³⁾ 米岡三郎来る

鳴鷺より文通、壚返却⁽¹⁴⁾

廿六日

或は聞、伯耆殿⁽¹⁵⁾・玄蕃殿⁽¹⁶⁾翔鶴船にて帰東、且来五日

紀伊殿御名代にて長州表江御発行、攻口被仰出と云⁽¹⁷⁾

廿七日 岡野平次郎来る、返金あり ○越老侯より直書、雁一羽賜る⁽¹⁸⁾

伊沢貞吉来る⁽¹⁹⁾ ○聞く、芸州江御先勢、出勢と云、伯州

は横浜逢接之事にて急速帰東歟と云

(12) 坊主

(13) 書院番士

(14) 福田鳴鷺(万屋兵四郎、敬業 書肆)

(15) 松平(本庄)宗秀

(16) 永井尚志

(17) 徳川茂承(紀州藩主 征長先鋒総督)

(18) 松平春嶽(越前藩前藩主)

(19) 軍艦取調役下役

廿八日

内田江御裏印名代頼遣す（但十二月来正月分とも二通）

佐藤与一（1）林家江参る趣申聞け

廿二日

河内守殿・伯耆
守殿外国御用
掛、兵部少輔
殿外国掛并

御勝手掛之趣
廻状来る

白井宗民寒中ニ来る、聞く、大老雅楽殿・参政

飛弾殿退職、松平周防殿老中、稲葉兵部

殿参政被仰付と云

廿九日

堀直太江文通 ○津輕藩四人明日退塾之由申聞

岡田斧吉来る

晦日

津輕藩四人今日引取

内田名代、丹波殿御裏印十二月分証（3）

十二月朔日

蔵宿江証文遣す 大久保江経世文編五冊遣す、

和泉屋江残り二冊 ○青山小三郎来る、聞く、京（4）

（1）佐藤与一郎（佐藤与之助子息）

（2）井上正直（十一月二十六日老中再勤遠江浜松藩主）

（3）平岡道弘（若年寄）

（4）越前藩士

征長は、当五日迄に諸責口人数相廻可申旨御達之由

師堂上方江遊説する者多し、皆会に属す、主意は

先日大坂海にて異国御取扱等、所謂城下之盟なり、

上朝廷二逼り、三港御許容、事頗る無御扱もの歟云々、

又細川藩・久留米藩・土州藩江国家之周旋為御褒

美賜ハれりと ○下民之浮説は、長州来春二ならは

再ひ公武之御間柄周旋すへしと深く頼む人氣

ありと云 ○征長征討之出勢、昨夏の如く諸家江

御達あり、越前家病氣之処、同勢計本多某⁽⁵⁾

督して大坂江可参旨被 仰渡ありと云

伝天奏野々宮殿辞表あり云、大意は、鎖港攘夷は

先年已来之 叡慮処、異艦大坂江逼り、事

情無御扱許容、甚恐入候事共云々と云

当節天下之御政事は、橋・会・桑より出て、幕

府之官人兎角の風評なし、可怪形勢と云

奥平清記・奥平老岐来る、聞く、川勝丹⁽⁸⁾
⁽⁹⁾廿四日頃歟

(5) 松平茂昭(越前藩主)

(6) 本多修理(越前藩家老)

(7) 野宮定功(武家伝奏)

(8) 伊予松山藩家老

(9) 豊前中津藩もと家老

(10) 川勝広運(十一月二十六日大目付となる)

波大監察被命たりと、風聞にては長州領分堺に

立札建て 勅使より他は一切生て出たすへからすの

趣意なりと云、此頃の風聞皆是に類す、一も信

すへからす

大坂来翰 十一月廿五日出

永井・戸川殿并松野孫八郎広島出張、其談判未承、

寛大之御所置と申事、街巷之風説なり、其趣意、

毛利家十萬石減地、父子隠居、淡路家督、奇兵隊

は毛利家にて養候様、尤十萬石減知は直に

吉川江御預ケと申事之由

当月十五・十六日、御旗本御先手歩兵隊二大隊、其外騎兵・

大砲大坂表出立相成申候

井伊・榊原・戸田・松山并紀伊殿御先手、昨日迄二出立相

成、彦根之陣押見候処、赤之大旗一手に三本、大差

物、火縄筒、大二歎息之至り、軍は六ヶ敷と被考候、

(1) 目付

(2) 毛利敬親・広封父子

(3) 毛利元蕃(周防徳山藩主)

(4) 吉川経幹(周防岩国藩主)

(5) 井伊直憲(近江彦根藩主)

(6) 榊原政敬(越後高田藩主)

(7) 戸田氏共(美濃大垣藩主)

(8) 松平(久松)勝成(伊予松山藩主)

(9) 徳川茂承(紀州藩主)

長州は新兵三十六隊^大取立、堺界を守り、日々調

練無懈^(意)体、大炮も余程出来之様子二候

御目付小林甚六郎殿^(筑)前^(筑)行被 仰付候由、是は

五卿⁽¹⁰⁾之取扱方と風聞二候

征長は、前文之諸侯芸州・石州境江出張、其

他西南・中国之諸侯も用意而已にて、出陣は不

被 仰付候

京摂共当時は人氣穩二相見へ、米価金貨も

少々下直二相成申候

吉野山銅山試吹仕る、銅・鉛・銀も有之、名坑之由相

聞申候、宇都宮⁽¹¹⁾分析いたし候へは、百分鉞石に銅

三十二分含居候由

二日

天竺屋より、当七月取入之銃、此頃引合之事ありと告ぐ

樋口喜久太郎来る、聞く、朝日丸といふ古船雲州八雲丸^持と

云、蒸氣にて引行、長州海岸攻撃之御用ニ充つと

(10) 三条実美・東久
世通禧・壬生基修・
四条隆調・三条西季
知

(11) 宇都宮三郎開
成所化学方)

○伊藤江来正月分御扶持方手形御裏印名代頼ミ、但御月番は土岐山城殿と云

夜中、町奉行池田筑後守より家来御役所江可差出旨申来ル

三日

越侯江返書差出す ○町奉行江使者差出す所、当七月

大島屋金七より取入候手銃不当之品二付、時宜ニ寄御取上

可相成、且買入手順書面、明日可差出旨申渡有之

堀直来る、⁽⁵⁾ 沓岐出板之料として拙当にて百兩借用いたし、⁽⁶⁾ 書物

右金子持参いたし呉候事

四日

町奉行江書面届使者差出ス ○和泉屋善兵衛江附

し奥平方江金子為持遣す ○岡野江銃之事申遣す

鳴鷺江薩払物一見不苦之旨申遣す

蔵宿江来正月分御扶持手形遣す

五日

(1) 伊藤左源太(書院番士)

(2) 土岐頼之(若年寄 上野沼田藩主)

(3) 池田頼方(播磨守)

(4) 松平春嶽

(5) 堀直太郎(薩摩藩士)

(6) 奥平沓岐

(7) 江戸の書肆

芸藩沢英左衛門明日国許江俄に出立之由、暇乞申聞る、又

聞く、長州⁽⁸⁾之家老芸州表にて、永井・戸川被 仰渡有之所、承

伏せず退散せりと云、風聞にては、今更罰を蒙むり咎を受

へき事なし、若御征討二候ハ、土道之路有之、御勝手二御勢を向

けられ可然と申たりしと云、証跡いまた慥成らす、若聞く如くな

ならは、邦家⁽⁹⁾是より擾^紛せむ、吾、昨是に及ハむを恐れ、建

言切成りしに、当時嫌忌を蒙むり行ハす、今にしては誠に

千載之恨、誰に向かつて訴^レ告せむ、嗚呼

○岡野平次郎来る、引合銃炮代廿九両三步渡、鉄炮返し

呉候様談す、唯此金は自分手元より出たす

六日

大久保一翁再々命、当十一日上坂と云、奥平⁽⁹⁾操一来る

七日

松平上総介来る、聞く、川勝⁽¹⁰⁾美作上京被命、又今日大久保主

膳正御用召と云

(8) 井原主計

(9) 奥平耆岐

(10) 松平忠敏(もと講武所師範役)

(11) 川勝広運(大目付)

(12) 大久保忠恕(十二月二十一日、寄合から京都町奉行となる)

岡野より引受之鉄炮二挺返却

奥平清記来る、松山より出納多しと

八日

久留米侯より軍艦⁽¹⁾□^(虫損)答合、永田恭平使

塚本恒輔来る⁽²⁾ ○津軽之藩四人明後日出立乞暇に来る

或は聞、板倉侯臣の話、長州穩に応命、且云、寄兵隊の者⁽³⁾

蒸気船或は英艦に便して大坂江潜行せし者共あり、公儀にて

是等御所置を乞ふと、当時の風評紛々として不可信

事多々

十日

奥平老岐・鳴鷺来る 大村藩^(イマ) 兵馬来る

十一日

堀生来る、佐土原藩入塾頼趣申聞、また聞く、長州之御談

判二云、不応命は寄兵隊成る^(奇)、藩士は然るへからず、若^{へし}

右之者等所置すること不能は、御勢を向られ御所置有

(1) 有馬慶頼(筑後久留米藩主)
(2) 塚本明毅(軍艦役勤方)
(3) 板倉勝静(老中備中松山藩主)
(4) 筑前藩士

るへし如何と、其返答未詳

十二日

吉兵衛江金子頼遣す預

十三日

夜九ツ前浅草より出火、本所処々類焼

十四日

柴山良介(5)来る、喬木遷一同道、入塾を乞ふ

十五日 微雨終日

十六日

青山小三郎来る、越侯より鱈味噌(6)積(廣力)到来、荻野小四郎より

鱈之子到来 奥平沓岐来る

中島三郎助来る、大関肥州之内話あり(7)

十七日 薩藩堀清之進、明日長崎江出立、暇乞来る

十八日 今日年越

十九日 立春

(5) 薩摩藩士

(6) 越前藩士

(7) 軍艦頭取出役
(8) 大関増裕(海軍奉行 下野黒羽藩主)

廿日 妻木⁽¹⁾より年始御太刀献上之伺可差出旨申来る

岡野銀三郎・奥平竜岐来る

(岡野より世話いたし候銃一挺返却)

川勝美作より掛物返却

廿一日

朝夷捷次郎来る、近々浦賀江帰郷之由

廿一日

杉浦金次郎来る、究迫^(窮)、何方へか被雇度趣申聞る

内田直之允来る、聞く、赤松⁽³⁾左⁽⁴⁾・木村撰津、今一人^(皆御)目付、退職帰府と云

廿三日

廿四日

小鹿⁽⁵⁾、調所ニ而銀三錠を賜ハる ○内藤仲来る^(歳暮)久

留米藩梁野生、早にて国許江立帰罷越、明日出立^(但塾生)

軍艦注文之事也、与之助方江一封を託す

廿五日

中村敬輔⁽⁶⁾より英辞書二冊返却 ○越老侯より来翰、中根⁽⁷⁾

(1) 妻木頼欽(寄合肝煎)

(2) 軍艦組

(3) 赤松範静(十一月二十六日辞)

(4) 木村喜毅(十一月二十六日辞)

(5) 海舟長男

(6) 中村正直(儒者)

(7) 越前藩士

雪江出坂、是は松・唐閣老より飛札御到来二付てと承る

廿六日

岡野銀三郎来る、□米代四拾兩返金、脇差一腰借

薩州より唐屏風為持遣し

○坪井芳洲来る、沓岐之事薩江再掛合呉れ候様頼ミ

廿七日

堀直来る、今日上京之由、聞く、去ル十五・六日頃 一橋公御乗切

にて御下坂、小松帶刀被召寄、傍觀致し不申、可然御周

旋可然と、御受二云、昨已来 公辺之御主意耽と不奉承

周旋之故、万事猜忌を蒙り、甚迷惑仕候、今度は

御主意之程篤拝承、右御手繼にて御用被仰付候様

と申上候処、御主意と申別二御策も無之、唯々可然様との

御沙汰にて、当惑御断申上ると云

○永田恭平来る、久留米侯より祝儀到来

○竹口喜左衛来る、乳熊之店竹口江譲り、退転せしと話、梅

成は箱館より秋中歟歸り来れりと

(8) 板倉勝静(老中)と小笠原長行(同)

(9) 坪井為春もと薩摩藩医 西洋医学所教授

(10) 久留米藩士

(11) 竹口信義(伊勢商人 竹川竹斎弟)

○今日諸方江附届いたし如例

廿八日

地方より式両老朱来る、いまた勘定不残済切す趣也

○岡野江刀出来二付為持遣す、万兵唐屏風之事申

遣す

聞く、政府青錢一錢
則十二三万兩を市中より御買上
去ル十
八・九日一兩
錢通用

二付冥加錢五十錢、万兩二付百兩宛召上らる、其後廿一・二日頃、

無差支通用敵敷被仰出、猶御引替は一文錢則銅
錢と共な

らては御引替被下難き旨、敵敷市中江被命と

当暮は、世上錢之通用悪敷、年々市抔は殆人出でず、

諸品高価之处、勢ひうれ難き故、自から価を低くし

たること格別なり、去れとも不融通、諸人寂々として旧時買人なし、

に似す、又タくれより所々人込之中にて強盜・追落まゝ

あり、夜は益寂然と云、空手の人は空奔する而已と、

衰世之勢歟、可歎々々

(1) 万屋兵四郎(福田鳴鷺の略称)

廿九日

鳴鷺来る、唐屏風今日遣し呉候様申聞ける

妻木より年始御太刀、以使者献上之儀伺之处、献上に不

及旨被 仰渡之達也

薩藩兩人帰府、国元より長崎に到れりと云

或は聞く、蓮池御金藏之御金三拾余万両御取出と、是ハ

全く御軍用之御予備なりしに、御費用継ぎ難き故と

云、又要路五・六輩諸事御改革之掛被 仰付たりと云

△
慶応丙寅二年正月元日

大坂安井翰介より来状 九ツ時過より ○四ッ谷伝馬町二・三町出火、屋敷

炎を遁る、吉兵衛類焼

二日

吉兵衛江預ケし金子返し遣す、受取置

三日 暴風雨、雪、昼後晴

杉浦より旧臘之詩作を寄す、聞く、大久保主膳正も

(2) 安井九兵衛(大坂町方南組惣年寄)の子息

(3) 大久保忠恕(京都町奉行)

旧年上坂、未無便と云

四日

五日

鈴藤勇次郎来る、聞く、米利堅より来る軍艦仏人江渡、
伝習を受くと、児戯可笑と云

六日

岡野平次郎来る、杉浦江一封頼ミ遣す

七日

安藤太郎来る、同人金川(神奈川)にて英語を学ふと、仏郎西の
カシ(2)ョンに政府官員欺かるゝ事、衆人皆笑ふと云

八日

奥平竜岐来る、岡野より文通、克蔵暇呉候様申出候由
申来る、或は聞く、小野友退職と(3)

九日

岡田留吉・有泉敬之丞来る、○岡野より使、克蔵又滞居并

(1) 軍艦頭取

(2) フランス公使
館書記官

(3) 小野友五郎(勘
定吟味役)

於綱縁談整う趣知らせ⁽⁴⁾

十日 春雨微々

払暁、芸州上屋敷出火

十一日 杉浦金次来る

十二日 黒水泉次郎来る 内藤仲来る、金談頼ミ

十三日

有馬家より門入、四人来る、永田恭平同道、聞く、長州

江永井・戸川⁽⁵⁾之両使被遣、芸州にて御詰問八ヶ条之所、

一々承服せず、因て京師にて此上閣老下り敵

敷御詰問可然と云議と、其俣御取掛可然と云議と

を以て両議紛々、大坂又是に同敷、御国難之

筋起れりと、可歎々々、又聞く○⁽⁷⁾

越老侯より直書有之⁽⁸⁾

天竺や儀兵衛年始

○旧臘、春迄御滞坂にては、年始之御参

(4) 海舟の次女孝子 疋田家に嫁す

(5) 永井尚志(大目付)

(6) 戸川安愛(目付)

(7) 本頁最終行「○旧臘春迄御御滞坂にては」に続くことを指示したもののか

(8) 松平春嶽

内、其外莫太之御物入故、鳥渡御東下可然と云

御内議起れりと、又聞く、芸州にて御詰問之時は、

宍戸⁽¹⁾備前介と云家老出たり、窃二聞く、是は自身

にあらず、山形^{半助}蔵宍戸と号して対御答せりと、

山形は先年来度々予か門二遊びし者、頗る

時情を解せり、碌々の徒にあらず

○奥平⁽²⁾屯岐親父死去の知らせあり

十四日 春寒終日、微雪雨降る

十五日

吉兵衛江預り金之内式百金^(ママ)歸し持参す

十六日

岡野江祝としてさらさ一反遣す ○細川家留守居

沢村脩造⁽⁵⁾江文通、^(蔵)慎助之事申遣候返答催促致遣す

○柳川藩兩人入塾申込む

佐藤与之助より文通、大久保一翁は水野痴雲⁽⁷⁾同様

(1) 宍戸璣(長州藩士 正しくは備後助前名山県半蔵)

(2) 豊前中津藩もと家老

(3) 奥平正韶

(4) 松野孫八郎(目付)

(5) 肥後藩江戸留守居役

(6) 馬淵慎助(肥後藩士)か

(7) 水野忠徳(もと外国奉行・箱館奉行)

戸川・松野の輩⁽⁴⁾
を以て御糺問
ハヶ条の御事
写到来、窃二
歎する処有
て御糺問の事を記す、
成ること

御相談相手と云を以て登城すと云、長州之御所置
先日聞込事と同段、松・唐両閣老上京有之、
右御所置之事歟と云 ○大坂内海礮場御取立
御下知、御入用は大和之銅山を以て当てらると云、
御供方悉く情気、有心者は歎息すと

十七日

十八日

対州侯より虎皮一張、三所紙料を賜る、使者扇源左
衛門来る、聞く、対州昨年之激論十一月二到り、巨魁之
者十三人切腹にて鎮静し、其頭取は平田某と云、其
内多賀壮藏と云者一人脱走すと

○杉浦兵庫、箱館奉行被命しと云しらせ来る

十九日

杉浦金次郎来る、何方へか被雇行き度旨頼ミ申聞る
聞く、横浜製鉄所も微々として進まず、空敷入費

(8) 宗義達

(9) 平田大江(対馬藩家老 十一月十一日に斬)

(10) 多田莊藏(対馬藩士)

(11) 杉浦誠 号梅潭(正月十八日箱館奉行に就任)

を算する而已と

廿日

柴田権之進来る ○柳川藩入塾頼込式人也

廿一日

薩藩国元江出立之由にて退塾四人、種⁽¹⁾ヶ島・

湯地⁽²⁾・吉原⁽³⁾・桐野四人

万兵江万国公方法^(ママ)之事承りに遣す、岡野書通

○唐津より昨暮之祝儀為持越し

廿二日 万兵より公法二部為持遣し

薩藩^(ママ) 西郷真⁽⁴⁾吾帰国乞暇として来る、小松江⁽⁵⁾

一封、公法二部頼ミ、真吾は大島吉之弟也⁽⁶⁾

○柳川藩兩人入塾 ○奥平⁽⁷⁾より文通、身上之歎云々申越

廿三日

越前江万国公法一部呈す

○青山小三郎来る、聞く、会藩此頃大に快くなり、集会

(1) 種子島敬輔(二月米国へ留学)

(2) 湯池定基(同右)

(3) 吉原重俊(同右)

(4) 西郷従道 薩摩藩士

(5) 小松帯刀(薩摩藩家老)

(6) 大島吉之助(西郷隆盛)

(7) 奥平耆岐

又聞く、肥後之上書は、昨出兵の被仰渡ありしに、先年長州服罪後、未タ御所置無之、更に又御征討と申ては、御名立難き歟、是にて出兵及び難く、篤と御取極、御所置の

等専ら会津より手を附くと、是によつて藩之嫌忌も

殆と薄らきりしと云^(ママ)

○柴山良介来る^(助) ○内藤仲来る、金子之話有之

○高橋嘉兵衛来る

廿四日

久留米侯江公法一部并書状ヲ呈す、今日飛脚江附

すと返事来る

廿五日

岩下佐次右衛門来る、聞く、肥後侯より京都に出居たりし⁽⁸⁾

周旋方など云者両三人、国江帰し上書して云、長州之御所置

等之正敷御譴責にもあらは、恐ながら御内政向おなく

公平に出て後、他正大に出たき杯申たりと、彼之周旋方杯

云属ひ、諸方より会藩に取入り、専ら国事を議すと云

又聞く、会津家も 御進発御すゝめ被申上しか、御所

置何れ共埒明す、大に困せりと云、今専ら藩薩を

(8) 岩下方平(薩摩藩家老)

(9) 細川慶順

御模様立て
後御達次
次第出兵可
仕云々也と、此上
書、旧臘右に
国論定たりしと
云

説きて周旋同敷力を尽さむ事を以て、頻に相談に
及へりと

廿六日

岡野平次郎来る ○内藤忠次郎来る

廿七日

杉浦金来る ○越公より御直書来る

大坂大久保一翁より手紙来る、云、旧年兩度登城、

言上之事あり、其後更ニ閑散、絶而御用なし

廿八日

内藤仲来る、金談頼ミ申聞る

津田真一郎⁽²⁾・西周助⁽³⁾、昨臘和蘭より帰り候趣にて

来る ○酒井左衛門尉より、昨暮之束脩三百足到来

廿九日 別当質入りたじ候鑑取出す⁽⁴⁾
代金三兩貳分
渡す

星野平八江文通いたす 奥平沓岐来る、身上之

事頼ミ ○柴山良介来る、杉金頼ミ度趣、直に

(1) 杉浦金次郎

(2) 津田真道(慶応
元年末オランダ留学
より帰国)

(3) 西周(同右)

(4) 酒井忠篤(出羽
庄内藩主)

当人江方参る趣申聞る

晦日

奥平より文通有之、身上之再歎申越す

京都小松帶刀方江一封差出

御証三通御扶持二・三ヶ月分二通伊藤江名代(5)

頼ミ為持遣す ○別当妻今日引取、子供江米

斗、金子貳両為養育遣す

二月朔日

対州侯江公法一部・書翰并大島友江手紙差出す(6)

杉浦金来る、明後出船之由 ○伊藤江頼候御証文御裏印

済、清七方江為持遣す ○越侯江御返書差出す

○岡野江鑑為持遣す

○聞く、薩、長と結ひたりと云事、実成る歟、我門柳川の

士、当春薩船二便して下之関江到りしに、長より早速使

者差越、手厚成りしと、又聞く、坂龍今長に行きて(7)

(5) 伊藤左源太(書院番士)

(6) 大島友之允(対馬藩士)

(7) 坂本龍馬(志士土佐藩出身 海舟門下)

是等の扱を成す歟と、左も可有と思ハる

二日

山本龍二・内藤興来る ○越藩加賀九郎次郎来る

三日

吉兵衛預り金之内百両使江渡す

星野平八来る、沓岐之身上云々を申聞る、云、近日

国許より家老某来着、極而同人委曲之取計いたし

可申事哉と

四日

内藤興^中之助江金五百両借り遣す、但三百両は父子両

印、貳百両は中一印にいたし置呉候趣申聞、此書付は小拙

手元江取置候事

五日

星野平八来る 鳴鷺⁽¹⁾来る、聞く、昨年町々より出候御

用金千両已下之分、被仰渡之通、五ヶ年賦御返金有之と云

六日

(1) 福田鳴鷺(万屋兵四郎、敬業)

嗚呼、古今
君臣の際、其
所しかたき事
皆如此、ひとり
今而已ならむ哉
古賢の如斯際
に所する点可
思可考、是学
問中の緊要
所以る活歴史
歟

七日

柴山⁽²⁾より手紙来る、長州罪案 御所江被仰上之写来
る、則御決議の所と云

奥平⁽³⁾壱岐来る ○松平上総介来る、聞く、

阪城にて会桑より言上、諸官之変転其ことく

成らざるものは、密事ありて

君上御耳二入りしものあり、和泉殿杯も⁽⁵⁾

君上の思召にて退職せず、兎に角板倉殿あたり⁽⁶⁾

は 御聞江よろしからず、其他小吏の如き者も皆

上意に出て、選挙なしかたき者数人ありと、

微臣か輩また 御忌の中成る一人なりと云

○越藩加賀九郎次郎入塾

○或は聞く、唐津侯長州江御出被 仰渡の事ありなと云

風評ありと

八日

(2) 柴山良助(薩摩藩士)

(3) 松平忠敏(もと講武所師範役)

(4) 將軍徳川家茂

(5) 水野忠精(老中出羽山形藩主)

(6) 板倉勝静(老中備中松山藩主)

(7) 小笠原長行(老中肥前唐津藩世子)

岡野より使来る

九日

内藤忠次郎・石井新八郎来る

十日 尾玄同公今日御着府と聞く⁽¹⁾

薩藩兩人来る、運用書借

十一日

金川定役^(神奈川)来る

十二日

十三日

松平上総介来る 善兵衛江彫刻料六両貳分渡す⁽²⁾

或は聞、玄同公は旧弊無着之御方にて、京摂之間に

御周旋あれ共、御説殊に立たす⁽²⁾、ゆへに無御抛御東下

之御事あり、所謂敬して遠さくるのいゝなりと

十四日

箱館之在住池田伊右衛門来る、彼地も散々なりと、小吏

(1) 徳川茂徳(尾張藩前藩主)

(2) 和泉屋善兵衛(書肆)

金を溜めて、土地にかまハす貪る事甚敷し、嗚呼

何方も皆同弊成る歟、可歎

十五日

春雨

十六日

聞く、去ル十日頃、大坂より小筒組其他芸州江発すと、是

は唐津侯長州江被仰渡之事あり、御出二付出張

去る八日

也、其組江仰渡されは、彼応命せされは御征討

にも可及旨なりと云

十七日 十八日

今朝町奉行池田播磨御役宅江家来可差出旨、昨

(3) 池田頼方

夜達あり、則出たすに、旧臘申渡之鉄炮金納之積

可心得旨申渡

岡田留吉来る、聞く、唐津侯廿日頃二は帰坂之

風聞ありと、また同侯京撰之間風評悪敷

なりしと、是は人撰を主とせず、建言之類悉く

弁駁するに因れりと、会藩士之話

十九日

岡野江鉄炮之事申遣す

廿日 仏僧カシヨ⁽¹⁾ン、外国人日本在留不承知にて、帰国を

廿一日

廿二日 促と聞く

青山小三郎⁽²⁾来る、京阪之間無事、唯唐津之帰阪を待

而已と、絶て別条なし

廿三日 開成所江草稿出板伺差出す

廿四日 蔵宿より明日天気次第、玉落為知有之

浜口興右衛門⁽³⁾来る ○大助江山路方江御裏印願名代

之事頼ミ遣す

廿五日

開成所にて出板伺相済

(1) フランス公使
館書記官

(2) 越前藩士

(3) 軍艦組

廿六日 曉微雪

廿七日 玉落二付、米五俵来る

春嶽公より来翰 ○大久保一翁昨夜帰府之由

為知有之 ○岡野平次郎来る ○嘉兵衛来る

奥平壱岐来る

廿八日

廿九日

玉落二付、勘定九両貳分トー一錢来る ○細川家沢村

脩藏方江慎助事申遣す^之

三月朔日 昨夜より大雨、夕二到而止

奥平より払物之料三両貳分差越、正字通返却す

二日

岩下⁽⁵⁾・柴山⁽⁶⁾来訪

三日

(4) 小姓組 岡野
孫一 郎子息

(5) 岩下 佐次右衛
門(方平 薩摩藩家
老)
(6) 柴山 良助

有泉⁽¹⁾来る、刻本之事談遣す

四日

大島萬兵衛来る、悴入門 ○大坂より文通有之、長

州家老穴戸某⁽²⁾罷出、此度被 仰渡之御趣旨

朝廷之御旨とは相反居候哉、右にては國中穩申間敷

候間、御請仕難き段、唐津閣老江演舌すと云

五日

片山椿助・万兵并白戸石介来る

六日

杉享造来る、柴誠一来る三日大坂より服部左衛門佐

船にて帰府、十五日頃再ひ同人大坂江行くと云

七日 内藤忠次郎来る

○大久保一翁来る、聞く、大坂空評盛にて皆名節

に暗らし、長州多分承服すべき歟、必らず後

拳六ヶ敷からむと

(1) 有泉敬之丞

(2) 穴戸備後助(磯長州藩士)

(3) 小笠原長行

(4) 軍艦頭取

(5) 万屋兵四郎(福田鳴鷺)

(6) 慶応元年十一月講武所砲術教授方出役となる

(7) 杉享二(開成所教授 海舟門下)か

(8) 長崎奉行支配調役

(9) 服部常純(長崎奉行)

八日 ○⁽¹⁰⁾

九日

十日

杉田玄端来る⁽¹¹⁾

十一日

杉浦兵庫来訪、当廿八日箱館江出立と云⁽¹²⁾

十二日

十三日

十四日 湯地・種ヶ島⁽¹³⁾より之来状、大坂より着⁽¹⁴⁾

十五日

松平上総介来る

十六日

十七日

十八日 大坂より来書、云

今度芸藩詰之者より別紙之通申越候、彼地之評にて

(10) 前頁七日条「大久保一翁」の記事が入ることを指示したもののか

(11) 外国奉行支配翻訳御用頭取

(12) 杉浦誠 号梅潭(箱館奉行)

(13) 湯池定基(薩摩藩士 海舟門下)
(14) 種子島敬輔(同右)

は、兎角鎮撫難相成評にては密々承候へは、一橋様⁽¹⁾

御舎弟民部太輔様毛利家江御養子之尊有之、左⁽²⁾

様相成候ハ、鎮静可仕敷之風聞も御座候、尤末家

并家老御呼出之使者芸藩より二月廿八日長州江

罷出、依之諸藩共治乱之境と申居候由二御座候

一、小笠原様は、少々御風邪にて示今御引込之由二御座候、⁽³⁾

是は御当表江御問合向并長之事情御探索之為と

風評仕候

一、今度之御進退は、未タ御決断無之との事、且亦御供

方は東帰心頻り二動き候体、且又当御表之事

一も御落着無之様子、乍恐奉断腸候

一、世評ニ云、長よりは大成る事件差起り候と申候へとも、

此義は一向不分明、定而浮説と奉存候

一、当六月中、京撰之間二暴発有之との事、浪人申

せ候由、是も疑惑為抱候流言に可有之と、人々相唱申候⁽¹⁾⁽²⁾

(1) 一橋慶喜(禁裏
守衛総督)

(2) 徳川昭武(徳川
斉昭十八男)

(3) 小笠原長行

穴戸備後介より芸藩江差出候書面之写

此度御達之旨有之、末家毛利左京・毛利淡路・毛利讃岐・

吉川監物外穴戸備前・毛利筑前、御当地迄罷出候様

御達相成候二付、銘々在所表江早速御使者をも被差

立候由二承り候処、已二去ル八月御尋之趣有之、末家并

家老之者大坂迄罷登候様御達相成候節、孰も気分

不相勝候二付、上阪之義御断申出置、其後末家中

孰も快氣仕候者有之義も承り不及候、殊二備

前・筑前兩人義は、去秋大坂迄可罷登様、於国元

内決も仕候へ共、同敷不快中二罷在、備後介儀ハ、備前

一名中之者故、為名代差出、筑前は同様二付、井原主

計差出候所、是又途中より気分不相勝候二付、其

末木梨彦右衛門名代相勤、御尋御用も拝承仕候

位、右備前・筑前義、此度とても御当地迄早々罷出

(1) 毛利元周(長門府中藩主)

(2) 毛利元蕃(周防徳山藩主)

(3) 毛利元純(長門清末藩主)

(4) 吉川経幹(周防岩国藩主)

(5) 長州藩家老

(6) 長州藩家老

(7) 長州藩家老

(8) のち相原治人(長州藩士)

候義如何可有御座哉、尤其後時日も経候事故、

快起仕早々御当地迄罷出候様相成候歟も不存候へ共、

去年已来之处心附候低入御内聞候間、可然御含

置被下度相願候、已上 二月廿七日

十九日

伊達之御伯母様御出 ○岩尾内藏允来る、聞く、長崎

にて近藤昶次郎仲ヶ間之議論にて割服(ママ)すと云

廿日 薩州邸江此頃英之都督往来、岩下江

廿一日 逢接、其訳不知、薩之御嫌疑甚敷と云

廿二日 永田恭平来る ○青山小三郎来る、聞、当春長州

之奇兵隊横行、本藩と隙あり、本藩敗走、

此節は大低奇兵隊之説行ハるゝと云

廿三日 佐藤与之助方江括要廿部久留米便二頼む

越前并久留米侯江括要三部宛相呈す

(1) 岩男俊貞(肥後藩士 海舟門下)

(2) 近藤長次郎(海舟門下 海援隊士 正月切腹)

(3) 久留米藩士

(4) 軍艦組 海舟門下

荒井郁之助来る、聞く、プロイス之事務宰相⁽⁶⁾ユスマ
ルクと云者、頗る英勇之風あり、同国興起すへきの
説ありと云

廿四日 和泉屋より括要七拾五部来る

開成所江括要校正本差出す

廿五日

松本寿太夫来訪⁽⁷⁾

廿六日 奥御祐筆の三日限早打大坂より着と云、子細密々也

有泉敬来る、聞く、長州表江大坂より二番操出と云

加納次郎作来る⁽⁸⁾ ○内藤忠次郎来る、聞く、長藩より

芸之御先手夜討あり、死傷多し、然れ共御届は纔

の事の由に認出されたりと、虚実不分明也（全く風説而已）

廿七日

昨は聞^(7A)く、大坂市中江三百万兩之御用金被仰付之儀

定まりしと云

(5) 講武所奉行支配取締役

(6) ビスマルク

(7) 小十人組

(8) 摂津御影村の廻船問屋

柴田権之進并仏国展覧会受負人来る、云々の

困話有之

廿八日

細川家より留守居河村脩藏使として来る、慎助世

話いたし遣候礼申聞、端物料被送る

廿九日 晦日

⁽¹⁾ 石川周二・内藤仲来る

四月朔日 浜口興右衛門来る、時計預り置

肥後藩兼坂熊四郎・馬淵慎助来る、小楠之書

翰持参、聞く、小楠之甥予か門横井左平太・⁽⁴⁾ ^(ママ)

之兩人、国侯之命にて米国江留学、長崎より発

船す、又肥前よりは当春⁽⁵⁾ 八郎・石丸虎之兩人英

国江行くと云、又聞く、当春より去暮之筑前藩争⁽⁵⁾

動之実は、世子を立て当侯を廃するの議より⁽⁷⁾

起りしなりと⁽⁸⁾

(1) もと富士見宝蔵番之頭

(2) (3) 横井小楠門下

(4) 横井左平太と弟大平

(5) 馬渡八郎(のち俊邁 肥前藩士)

(6) 肥前藩士

(7) 黒田慶賛

(8) 黒田斉溥

夜四ツ時頃より芝大門前より出火、芝口迄大凡八・九町

焼ると云 ○池田播磨⁽⁹⁾より浜武慎助呼出手紙

来る

二日

慎助町奉行江罷出、鉄炮之引合仮口書申渡

三日

四日

国友式右衛門来る ○細川家江括要廿五部を呈

す ○薩人三人来訪、岩下生⁽¹⁰⁾先月十九日帰京

出立、又京地小松⁽¹¹⁾・大島氏⁽¹²⁾帰国すと云

五日

京師川勝⁽¹³⁾江書状、宅江頼⁽¹³⁾ミ遣す

六日 近日、京撰は申に及ハす、東都市中にて諸官

七日 之風評甚悪敷、紛々なりと云、誠ニ歎息す

八日 へきの限り也

(9) 池田頼方(町奉行)

(10) 岩下佐次右衛門(方平 薩摩藩家老)
(11) 小松帯刀(同右)
(12) 大島吉之助(西郷隆盛)
(13) 川勝広運(大目付)

対藩扇源右衛門、明々十日大坂江出立二付、為暇乞来

訪、聞く、去月八日翔鶴丸にて監察佐賀江内御用とし

て着船すと、又唐津⁽¹⁾侯先月廿六日之状迄は出勤

無之、長州江御談示中也、且御同人京師辺風聞宜

からず、或説二は、二条⁽²⁾関白殿御家司某周旋にて、

閣老之命あるに及ひたり抔云々⁽³⁾大島友正詩一章
送る

九日

十日

十一日

伊藤江頼⁽⁴⁾ミ四・五両月分御持^{二ケ}扶手形裏印、丹波殿

にて相済み候由にて為持越す

十二日

肥後藩牛島五⁽⁶⁾一郎・兼坂熊四郎来る

十三日

(1) 小笠原長行

(2) 二条斉敬

(3) 大島友之允(対馬藩士)

(4) 伊藤左源太(書院番士)

(5) 平岡道弘(若年寄)

(6) 肥後藩士 横井小楠門下

蔵宿江御扶持手形為持遣す

十四日

十五日

肥⁽⁷⁾藩大田黒権作来る、聞く、町中之風聞二は、長之穴戸

備後介と井伊家之家老と争闘あり、死傷三十人程二及

ひしと云、又聞く、唐津侯大坂江御帰りありしと云、風聞

不可信、聊聞く処を以て記す而已（必らず空評ならむ）

十六日

大坂より本月八日出之書状着、云

長州之事件別紙之通二而、昨日軍目出馬等被

仰出候、尤出芸之諸藩は討入之覚悟と相成候由、乍

去、不堪疲弊、不得止之謀と大息仕候、外又大坂

在留之藩も疲弊無此上、戦争二は無覚束者と

歎慨此事奉存候

小笠原侯は弥御追討之御決着二相成候由二候へとも、

(7) 大田黒惟信(肥
後藩士)か

緩急之儀如何御座候哉、⁽¹⁾^(監)兩鑒察此間帰帆、何歟御
評議中と申事承及候

兎角物価日々沸騰、玄米売石二付八百目余、其

他右二準し人心不穩、当時二到り劇場其外不

繁昌之由、弥 御追討二も相成候へは、京坂間二一事

有之間敷哉と深心痛仕候、尤御供之向々も、戦争は

無キ覚悟之所、近頃又々兆有之候二付、恐縮致居候族

も相聞、彼は大齟齬出来申間敷哉と奉恐察候

当二月中長州末家・家老御呼出之所、⁽²⁾長府及清末⁽³⁾

は病氣御断、家老亦御断、⁽⁴⁾徳山・⁽⁵⁾岩国⁽⁶⁾は是より御答

可申上旨御請二而、其外、只今二到り候事故、乍恐

御進退爰二究り候事、右二付一大破も又可宜抔風

聞も御座候、何分二も諸藩其外疲弊は驚入候事二

御座候

長州御所置今一層寛大之儀、諸藩周旋方より申立候

(1) 滝川具肇(大目
付)と岩田通徳(目
付)

(2) 毛利元周

(3) 毛利元純

(4) 長州藩家老宍
戸備前と毛利筑前

(5) 毛利元蕃

(6) 吉川経幹

四月朔日御達

⁽¹⁾ 松平安芸守江

別紙書付⁽¹²⁾宍戸

備後介⁽¹¹⁾江早々

相達候様可仕候

宍戸備後介

毛利大膳・毛利⁽¹⁴⁾

長門惣領興丸⁽¹⁵⁾江

相達候儀有之候間、

来ル廿一日迄二芸

広島表⁽¹⁶⁾江可罷

出候、若病氣

者有之、右二付、一橋様・会・桑両侯申上有之、関東表

之御所置尤二候間、以後左様之義不申立様、

京都より御書付ヲ以而近々被 仰出候と之事、窃二承

及候

別紙二云

去月廿三日、芸州世子⁽¹⁰⁾上坂いたし度趣小笠原侯江

申出候処、御差留相成候由、右は長州之御所置今

一層寛大之願二付、上坂仕、

御直言上仕度由之事、右は同志之大名十三藩と

申候由、尤 御聞濟不被在候ハ、京都江罷出、

朝廷江遂奏聞度由

同廿五日、右紀伊守乗船之上、上阪、届書差出し出帆⁽¹³⁾

との事、又評義相替候哉、途中より引返相成候由

四月四日、芸州家老⁽¹⁷⁾辻庄藏并外屯人上坂、前文

寛大之御所置之件々申上候由、乍去御取用無之との事、

此他長州家御呼出之御書付類略之(皆芸州取継也)

上件二加之

(7) 一橋慶喜(禁裏
守衛総督)

(8) 松平容保(京都
守護職 会津藩主)

(9) 松平定敬(京都
所司代 桑名藩主)

(10) 浅野茂勲(芸州
藩世子)

(11) 浅野茂長(芸州
藩主)

(12) 宍戸磯 (長州
藩主)

(13) 徳川茂承(紀州
藩主)

(14) 毛利敬親(長州
藩主)

(15) 毛利広封(長州
藩世子)

(16) 毛利広封嫡子

(17) 辻将曹 (維岳
芸州藩家老)

候ハ、末家并

一門之内為名

代可差出候、右

之段早々罷歸、大膳始江可申達候 四月

其内 口上覚

別紙書付相達

候間、毛利大膳・

毛利左京・毛利

淡路・毛利讃岐・

吉川監物江其

方より早々可被

遣達候

四月

毛利大膳家老

宍戸備前

毛利筑前

右之者共江相達

候義有之候間、

広島表江可

差出旨先達而

相達置候義

二付、若病氣

二而も、押而來ル

廿一日迄二罷出

候様可被申付候

四月

大膳父子并長門惣領等若病氣候ハ、末家并吉川⁽¹⁾

監物右名代をも相兼不苦候事

但末家・吉川監物等も病氣二而、名代差出候義二

候ハ、名代之者は本家名代二は難相成候事

大膳父子并長門惣領為名代差出候ハ、宍人二而相兼

候而も不苦候事

相達候期限二到り、名代も不差出候而不相濟義二付、

精々引違無之様、猶厚相心得可申候事

右之趣、宍戸備前介并此度為使者彼地江越候者江

厚く申含候様可被致候

四月朔日

右之通被 仰渡候由、尤 召二不応候ハ、其罪不輕と申

御書付有之由二候へ共、未タ入手不仕候

(1) 吉川経幹

(2) 毛利元周

(3) 毛利元蕃

(4) 毛利元純

毛利左京

本家大膳父子

并長門惣領興丸

江申渡有之候二付、

先達而其方江

相達候義有之、

広島表江可

被罷出旨相達

置候義二付、

若病氣二付而も、

可被差出候 四月

毛利淡路

毛利讃岐

吉川監物

右同文言

松平安芸守江

宍戸備後介始

一同御用相済

候間、早々当地

引払致帰国

候様可被相達候

三月

是より口上覚二

続く、下段二有之

右二付、昨七日唐津侯御家来上阪候由承及候

井上備後守殿去月中芸より帰着、當時在坂

岩田半太郎殿・岡部三左衛門殿被登、先頃帰坂、

当月十・十一・十二日迄広島表江出立之事、引続

紀伊殿・二ノ見・松平三河守・松平兵部太輔・内藤

若狭守・稲垣信濃守、其外追々

右は昨七日被 仰出候由

○薩州之船々江括要三十部を呈す 杉浦清介来る、

金子近々長崎方御沙汰可有之之由申聞

松平上総介来る

或は聞く、芸世子之上坂は唐津と意を合せ、唐津

は上辺勇を張れとも、勢征しかたきをおもひ、世子と

意を合して是より道を附けむの策なり、然るを

故障するあつて是を支へたりしなり忤いふ者あ

り、又異聞なり、兎も角も童稚輩終に事を

(5) 井上義斐(勘定奉行)

(6) 岩田通徳(目付)

(7) 目付

(8) 松平慶倫(美作津山藩主)

(9) 松平慶憲(播磨明石藩主)

(10) 内藤頼直(信濃高遠藩主)

(11) 稲垣長明(志摩鳥羽藩主)

(12) 松平忠敏(もと講武所師範役)

(13) 一八四頁本文二行目の「口上覚」に続くことを指示

破り、將た 君家を危くし且 国家を乱たさんと
す、爰に到つて歎息限りなし

十七日

聞く、此頃諸藩外国江行く者あらは、印鑑御遣しに可相成、
其上にて勝手次第、若印鑑無之者は嚴刑に所せらる
へき旨御達ありしと云、愚考に、是英より申立候事
なるへく、其出る所は薩よりはかりしなるへし

十八日

芸州之道家牧太・飯田旗之助・三宅万太夫江括要一
部宛送くる、一兩日前芸之蒸氣船入津と云

大宮貞来る、聞く、英人サトウ⁽¹⁾なる者、今専ら朝鮮

を学ふ、窃二問へは云、仏、朝鮮江手を入らむ^(と欠カ)す、故に英

是に先たつを欲す、必らず通弁我行くへし、ゆへに学ふ

と、同人は本邦之語に明成る者也

会津之附属新撰組之徒、伊勢辺迄出張、豪富之

官 (1) イギリス通訳

者より金子借用、尤会津より用立たる者江は上下を遣

し謝すと聞く

十九日

廿日

○国元式右衛門来る、当廿五日船出帆二付、廿四日迄二慎助暇呉候様申聞、且括要之礼として船より国産奉書紙到来

且諸藩小倉江出勢之御達有之由

○⁽²⁾三宅万太夫来る、国許蒸気船江岩田半太郎・岡部三右衛門

急御用にて御借受、帰府と云、紀伊⁽³⁾守上阪之一件は、唐

津相談之上なりしやと云、長征は弥御決議諸家出勢

御達出たりと云、京撰之人氣悉く幕府江逆ひ、

甚不穩なるといふは事実也と云、可歎々々

○仙台藩岩渕喜英来る

○竹内⁽⁴⁾野州江測量器戻し遣す、代価五拾両受取

廿一日

(2) 芸州藩士

(3) 徳川茂承(紀州藩主 征長先鋒総督)

(4) 竹内保徳(西丸留守居)

留学之御書付来る、⁽¹⁾悴四男相願度旨下ヶ札差出

廿二日

肥後藩津田山三郎・⁽²⁾牛島五一郎・菊坂兼一郎来る

黒水泉次郎来る

廿三日

杉浦清介来る、⁽⁵⁾柴山良介来る

奥平屯岐来る、⁽⁶⁾鳴鷺来る、⁽⁷⁾聞く、⁽⁸⁾備中庫敷二乱

妻木より留学
願出候者、名前・
歳附可差出旨
申来、即刻為
持遣す

妨あり、官邸を焼たりと云

又聞く、近日御藏金之大法馬、金之方七ツ^{目方四貫弐}

銀之方拾幾ツ^{目方三貫}御出方二成ると云、跡は各一箇宛

御貯、且此金銀大凡三百万両位二充つと云

此頃、両国辺見世物取払、俳優輩市中を追れ、^女髪結

之類御停止等、細屑の事頻り也と云

廿四日 慎助今日船江行く、但国許江立帰

⁽⁸⁾青山小三郎来る、春嶽公より賜物持参、此

(1) 海舟次男四郎

(2) 津田信弘(肥後藩江戸留守居)

(3) 肥後藩士 横井小楠門下

(4) 妻木頼欽(寄合肝煎)

(5) 薩摩藩士

(6) 豊後中津藩もと家老

(7) 福田鳴鷺(敬業)

(8) 越前藩士

侯之於小拙回顧甚厚、小拙一世を以而報すへからず、

我子孫忘るゝ勿かれ 聞く、備中之乱妨、三月中既

に⁽⁹⁾蒔田家陣屋・長屋江向け焼討之事あり、其発起

は、此小侯之領某寺と寺に式百人浪士滞留、是等取

締之事より蜂起すと云

廿五日

廿六日

有泉敬之丞来る 浦賀中島三郎助江括要一部遣ス

⁽¹¹⁾浜口興右衛門来る、時計返遣す

廿七日 佐藤与之助、当月七日小十人格大坂御鉄炮奉行並被仰付旨
廿八日 伊藤より御裏印名代出呉可申旨申越す

廿九日

嶽公呈書并英織蚊帳地呈上、青山江頼遣す

○伊藤江御裏印願証文式通頼ミ遣ス、日根野江断等⁽¹²⁾
⁽¹³⁾玖摩女之

○梶より凶を告ぐ、正月廿八日泊然として死すと、嗚呼、玖

磨姉生れて明媚、其志貞実、いやしくも浮操の風

(9) 蒔田広孝(備中
浅尾藩主)

(10) 軍艦頭取出役

(11) 軍艦組

(12) 日根野藤之助
(使番)

(13) 梶くま(海舟の
妾 梅太郎母)

なし、田舎二人となれ共、心行卓、学ハすして国歌を

賦す、念々皆聞くへし、可痛、其死の速やかなる、享年

廿六

五月朔日

甲賀源吾来る、海軍局日々寥々、頗る不平也

二日 蔵宿より四・五二ヶ月分御扶持米来る

伊藤より、当今月番縫殿頭御裏印済、御借米屯通、六月

小之分御扶持手形屯通届来る

三日

卯三郎来る、金談之事頼ミ、明後日否承り二可来と云、

蔵宿江手形式通持せ遣し ○安井・佐藤・梶江手

紙遣す

聞く、筑前太宰府居られるゝ五卿方、大坂江御呼寄と云、

右二付、諸家より警衛人数差出可申御達有之由、

薩州より長州之御所置二付建白あり、其旨趣は、此度

(1) 軍艦組

(2) 松平(大給)乗
謨(若年寄 信濃田
野口藩主)

(3) 清水卯三郎

之御挙甚然るへからず、但出勢之儀、御断と云々於大義て

四日 水野出羽守家来某来る⁽⁴⁾

五日

卯三郎江金子借用いたし遣す
500(イイ)

六日

七日

高橋嘉兵衛来る、聞く、神奈川附属之下役御暇出たり

と、并町中見世物・女髪結・娼家之類不残運上被 召上

と云 ⁽⁵⁾○井上河州、大坂表廿一日出立、此頃御帰府と云

岡田留吉 ○節句前にや、日本橋に張訴あり、

また紙を張りて云、徒党四百五十人ほとあり、護持院原

に集るへし、蔵前辺より打毀さむと云々

八日

三宅万太夫来る、当九日頃芸州之蒸気船にて監察岩

田半太郎外并に長州屋敷之者共六拾人程為乗組出帆と

(4) 水野忠誠(駿河沼津藩主)

(5) 井上正直(老中遠江浜松藩主)

云、長州之事は穩二濟へきと云内風聞なりと云、官吏表二
仮面をかふり威せとも彼おちす杯云風聞あり、また京地
之人心穩ならず、町家何となく要心而已と

嘉兵衛来る、鉄板十九枚最勝院隠居江譲り遣すことを
約す ○山佐并展覽会主六左衛門より使あり

九日 「鉄炮式挺之代受取

岡野平次郎来る、大坂より当二日之書状到来、略二云、

芸州二は宍戸備前養子備後介、岩国家老・用人

共四月廿三日罷出候由、依之昨今之所二而申渡済、早速

小笠原侯も御帰坂可相成と之風聞有之、左様相成候へは、

御上洛 還御と可相成由、是又風聞二而、人氣

益歸心動キ、勇氣更二不相見、慨歎至極奉仰

御賢察候

一、倉敷も川向二而小箇せり合相始り、一人召捕、一人討取、
其佗は散乱行衛不知、九州・四国の方江引取候由

(1) 小姓組 岡野
孫一郎子息

(2) 長州藩家老

(3) 宍戸璣(長州藩
士)

(4) 今田鞆負

二御座候

一、近頃京地江土藩・薩藩夥數入込、武器多分持

運候由、何そ事変可有之歟と、当表も追々其

御手当にて、御進発之大炮廿四斤よりナポレヲン

加農迄拾三・四挺、俄二御城中江御据付相成候積り、

攻は守二変し候義、是亦何等之御趣意柄歟、

一向了解難仕と奉存候

一、薩州は、長州攻口先手断然御断申上候事二御座候

以上

十日

十一日 卯三郎より口入金五百両返弁

岡野より万兵方届物唐紙・筆遣ス⁽⁵⁾

馬淵茂吉妻縁談之事申来る

十二日

久留米藩梁野生帰府、先月十八日国許出立、廿三・四日頃

(5) 万屋兵四郎(福岡鳴鷲)

迄大坂滞留、聞く、京坂間并箱根以西は人心不穩

と云、旅籠賃大低一貫文位貳百と云

十三日

卯三郎并岡田留吉来る

十四日

十五日 暁より暴風雨、寒温規十五度

十六日 寒温器十五度

○高橋嘉兵衛・馬渕茂左衛門来る、縁談之事申聞る

○大垣藩野村龍之進来る ○大久保より佐藤江届物被頼

○久留米藩前野雅門・辻幾太・高橋伝三郎入門

岡野江疋田兵庫之事承り二遣す

十七日

五月八日出之大坂より書状着、云、

長州より出芸之人々

徳山家老

福岡式部

(1) のち久留米藩
海軍船長

(2) のち久留米藩
海軍士官

(3) のち久留米藩
海軍機関方

(4) 疋田正善(海舟
次女孝子の夫)か

用人

飯田市郎右衛門⁽²⁾

合上下六拾人

岩国名代家老

今田鞆負

用人

目賀田喜助

同

山県佳衛

上下三拾人

長府家老

毛利伊織

三十九人

用人

金子 蔭

三十人

同

三島任三郎

五人

清末家老

平野市郎左衛門⁽⁵⁾

三拾人

萩家老格

宍戸備後介

備後介は此度備前養子と云名目二替
と云

家来四十人程

四月廿三日迄出芸二付、毛利大膳父子罪状二依而⁽⁶⁾

(5) 平野郷右衛門
(清末藩家老) か

(6) 毛利敬親

拾万石被 召上、大膳は蟄居、長門は永蟄居、興丸

を以而廿四万石余家督被下之、三謀臣は家名永断

絶被 仰渡、五月朔日相済、同廿日迄二請書可差出、

若遅々二及候ハ、早速御追討之趣二御座候、依之、過

激輩と長州本藩と又戦争二相成可申との噂

頻二御座候、何分二も世評一向不相分、睨と申上兼候、

只御供之面々は、情氣而已相見江、若此假

還御被為遊候ハ、一等遊情二陥り候半哉と大

息至極、兎角虚飾之世体、時勢之然らし

むる者歟と、慨歎此事奉存候

十八日

高橋嘉兵衛来る、疋田兵庫之母親明日参り、縁談之事

話いたし度趣申聞る

○唐津藩長谷川善兵衛来る、廿八日大坂出立と云

柴山良介来る、括要之返礼到来

善二聞く、去ル廿三日、長州末家岩国は名代差出せ

(7) 毛利広封

(8) 長州藩家老 国
司信濃・福原越後・
益田右衛門介の三名
(元治元年十一月十
二日切腹)

(1) 薩摩藩士

其仰渡されの
如きは、末家之
名代江附して、是
を達せられたり
と云

とも、本家にては誰も不出、備後介宍戸備前之養子と
いふ名にて出たる而已、強て恐敬之意なし、其国人江は
三拾万部活板を作り、告志篇各一部を懷せしむと、
当月廿日迄之御請万々無覚束と云、可歎可痛

十九日

浜口興来る、金子返シ ○疋田女隠居来る、縁談之話也

廿日 吉兵衛

廿一日

長谷川善兵衛明後日頃出立と云、佐与江一封頼む
長持之事、神戸屋支度頼遣ス

岡野銀三郎、疋田之事承合候趣申聞る

○大久保用人ニ親類書類ミ、昇と云者来る

廿二日

嘉兵衛来る、疋田縁談取極之事申来る

廿三日

杉亨三来る、聞く、当月八日兵庫に民商集会する

事一万四・五千人、忽ち四方に散入して富家を潰ち、

(2) 浜口興右衛門

(3) 佐藤与之助

(4) 大久保金四郎
(寄合肝煎)

(5) 杉亨二(開成所
教授 海舟門下)か

灘・西宮辺に及へり、鎮撫人数押ゆること不能、鉄炮

を以て打殺すと、ゆへに某山に集まること益多し

又当十二日大坂西横堀に商民集まり、忽ち多人

数に及び、五手に分れて富商を潰ふし、頗る乱妨

なりと、鎮兵是を討て、殺伐また多しと云、嗚呼天

下之形勢如斯、晩春我か窃愁ふる処あり、書記し

て越⁽¹⁾老公に呈せり、既二書中此事に及へり

○嘉兵衛并馬渕来る ○内藤^(ママ)江鞍鎧借シ遣す

○原田⁽²⁾吾一來る、頗る不平心裡恢々

廿四日

吉兵衛、小太⁽³⁾仕度之料九拾兩渡す

廿五日

西周⁽⁴⁾助来る ○内田隠居

廿六日

廿七日

若年寄衆之剪紙到来、即刻為請家来差

(1) 松平春嶽

(2) 原田一道(五月
オランダ留学より帰
府)

(3) 海舟次女孝子
の通称

(4) 西周(慶応元年
十二月オランダ留学
より帰府)

出たす

廿八日

登城いたす、御軍艦奉行被命、且別紙

被仰渡

勝安房守

大坂表江御用有之候間、立帰之心得ヲ以、急速

彼地江罷越候様可被致候事

廿九日

所々より悦来る

登城

○昨夜品川辺三・四家打潰ありと云

六月朔日

登城

今暁、田町辺打潰あり

二日

不快二付、断出たす

(疋田江結納遣す
同所より先ニ来る

(5) 内田直之允

甲賀源吾・黒水泉次郎来る

本日、鯨橋辺白昼打毀有之、人氣頗る騒然

○大坂より来翰、云

(5) 軍艦組

当月中旬頃、兵庫津一揆様之者蜂起、北風其⁽¹⁾

外分家北二等も大小破壊せられ候、尤丸岡御警

衛人数二而差支、怪我人も有之、夫より西宮・池田・堺・

難波村に波及し、米売升二付六百五拾文位之処、

貳百文二買取、或は無銭二而持行候者不少、大坂

市中同断、右二付、召捕人も不少、擾乱之兆シ

候へ共、俗吏は依然賄賂等も有之よし相聞申候、尤

此節諸方安売、又は施行等出シ申候

一、打続候雨天二而、十四日頃大洪水、大川は一丈七尺

五寸と申候、尚雨未止候間、洪水重而来るへく存候、

殊ニ冷氣甚敷、朝は拾二而も寒き位、此体二而

は、北国は五穀不熟二可相成、左候へは飢饉二到り

候半哉、兼々御説も伺候二付、氷潤之如く恐懼仕候

一、加州米は少々此節相廻り候由、肥後は一向不相

出候由、其外北国米払底と相聞申候

(1) 兵庫津の回船
問屋

一、長州御請は一昨廿日二御座候へ共、今二不相分候、只

別紙之通、備後介外屯人芸江御預ケニ相成候

一、薩州は、長州責口断然御断相成候、併御許容は

無之と申事二候

一、肥後は少々鶴崎江出張、其低、西藩は一向出張

相聞不申候、中国亦同断

右等之体二付、一々奮発も可有之候処、外見は戎装、

内心は東帰頻、歎慨ニ耐江不申候事二御座候

一、御城中江、海岸車台之大炮十八斤・廿四斤・六十

斤、陸軍方建白にて御据付之事ニ相成申候、併打手

は無御座候、諸方御台場も追々出来二候へとも、

砲も人も一向相見江不申、如何之御所置ニ相成候半歟

と大息奉存候

一、筑前五卿之義 御詫之上帰京之見込ヲ以て、小林⁽²⁾

甚六郎彼地江出張いたし候へ共、是亦落着無之

候哉、今以何之噂も無御座候、云々

三日

黒水より御勘定奉行御断下案来る、御殿江為持頼
遣す

四日

疋田兵庫・内田直之允来る

川路太郎来る ○竹川竹斎来る、聞く、長州之脱

藩人百五十人計堺江上陸、大和江入る、討手七頭之

諸侯江被命たりと云、阪地殊騒々たりと此説非也
唯百姓群集之事あり

原田吾一來る ○黒水より手形下案三通来る

五日

有馬阿波守達有之、御書付河内殿御渡之由

にて差遣すと云

――

日当御手当日金貳両、旅御扶持方御役高
之分限二応し一倍

(1) 川路聖謨(もと
外国奉行)の子息

勤仕並寄合

(2) 伊勢射和の商
人

(3) 有馬則篤(大目
付)

(4) 井上正直(老中
遠江浜松藩主)

大坂表江罷越候二付、書面之通被下候、尤日当

御手当は三十日以上は三分一減被下候事

○伊藤左源太⁽⁵⁾ 伊沢用人白兵衛来る

六日

蔵宿江手形三通遣す

柴山良介来る、聞く、長藩⁽⁶⁾六戸備後介御預ケ之後、

国人沸騰、国堺江出勢せり、然れ共戦争二不及対陣

すと云、又長之高杉新作長崎地にて外国人より三十万両

を借受、右を以て一戦の用途とせむと計る、又薩之家

老⁽⁷⁾伊勢は順弱之質なるを以て 召すこと頻なり、

京地の薩人同人を出たさす、去ル廿四日岩下佐次右衛門

阪地之召に応すと云

紀州殿芸州表江御降り有り、伯耆殿是に附

属成りと聞く

馬渕真助来る、細川より之建白は実也と云

(5) 書院番士

(6) 薩摩藩士

(7) 宍戸璣(長州藩士)

(8) 島津伊勢

(9) 岩下方平(薩摩藩家老)

(10) 徳川茂承(紀州藩主 征長先鋒総督)

(11) 松平(本庄)宗秀(老中 丹後宮津藩主)

(12) 馬渕慎助(肥後藩士 横井小楠門下)

横井小楠江細川家之家老列座にて其説を聞けりと云⁽¹⁾

七日 出殿 松平上総介来る、近々国許江帰村、且是⁽²⁾

迄被下之三百俵、地方引替之命ありと、又聞く、細川氏之
建白甚懇切之意を含めりと云

八日

出殿 明後日出立之事を申す、和泉殿より長崎丸之⁽³⁾
事御口上あり

九日

会藩林三郎、尾州之水野彦三郎来る、西国之形勢

且御所置を問ふ、別ニ答ふる処あらす

有馬家より悦之使者有之、聞く、英之ミニストル薩長江行⁽⁴⁾

きたりしに、其転末いまた不分明と云

小松帯刀より文通あり、薩之蒸気船入津に因て也、英⁽⁵⁾

人国許江訪らふと聞く

十日

(1) 思想家もと肥
後藩士

(2) 松平忠敏(もと
講武所師範役 六月
三日交代寄合持とな
り、三河の知行地へ
帰村)

(3) 水野忠精(老中
出羽山形藩主)

(4) パークス(イギ
リス公使)

(5) 薩摩藩家老

六月

御討入之事は、
別二記せしもの
あり、概して云ハ
皆敗走而已

⁽⁹⁾ 將軍江其由
言上、
秘密之
事也

廿一日

出立、品川本陣にて奥平清記二逢ふ、⁽⁶⁾ 老
老 沓岐之事
頼む趣申聞る ○内藤仲より五拾両受取

着阪

廿二日

⁽⁸⁾ 猶關東決議甚不可を云ふ

登城、伊賀守殿江御逢、⁽¹⁰⁾ 當時之猜疑不可然事を言上
聞く、芸州地にて ^(ママ) 井伊・榊原家大敗走

廿三日 廿四日

⁽¹¹⁾ 会藩手広木直右衛門江愚存を云

此日上 京、内御用被命、夕刻乗船

廿五日 京着、会家江一書を倚す

愚存之大意は、正大高明を^持□す而已、其枝葉はまた

瑣屑中之小細事、頗る書する恥^ヲす、高踏之念慮

益盛なり、衰世之万事書すへからす話す

へからす、此際に及て始て諸歴史之變遷たるを

(6) 伊予松山藩家
老

(7) 奥平沓岐(豊前
中津藩もと家老)

(8) (9) 海舟晩年
の後筆か

(10) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

(11) 手代木勝任(会
津藩公用人)

感慨す而已、此一兩年ことに世人疑惑するは、長之

成行、且来年兵庫之開港、御所は御不承知、

不可開と御決議之所、既二関東開港之逢接之取極

あり、此一事、其上乱階は、金穀欠耗二あり、今哉五穀

豊にして金貨また数員を増、後然るに政府欠耗

甚敷は尤可疑、後世解すへからさる一ならむ、嗚呼

廿六日

会津家江越す、論説言上、大低我か二等之^第□可被行

歟、薩之猜疑既二氷解せり

廿七日

川勝美作江一書并岩下氏江一書を寄す、皆内命⁽¹⁾

中之事件なり

廿八日

酒井十之丞来る、岩下来る、快話、発一笑、彼之⁽³⁾

藩知覚之開らくるを知る

此夜、豊前姫島⁽²⁾に積たる我か石炭百万斤、長人之為に悉く焼き失はる、七月

(1) 川勝広運(大目付)

(2) 岩下佐次右衛門(方平 薩摩藩家老)

(3) 越前藩士

七日、此注進あり

廿九日

会公・桑名侯江行く、兵理を談す

一橋公より明後二日夕参上、御逢之事申来る

七月朔日

聞く、大坂江下之関二居たる塚原但馬、（7） 松平容保（京都守護職、会津藩主）
（6） 一橋慶喜（禁裏守衛総督）
（5） 松平定敬（京都所司代、桑名藩主）
（4） 水野忠精（六月十九日老中を罷免）
（3） 稻葉正巳（六月十五日若年寄を辞し、若年寄格）
（2） 小野友五郎（勘定吟味役）
（1） 越前藩家老

帰阪すと ○先月十五日、和泉守殿御役御免、

差扣被 仰付、稻葉兵部殿参政願之通

御免、同格にて海軍之義御取扱被 仰付候

聞く、鴻之巣・熊谷・妹尾之辺、百姓一揆起れり、

甲州同断と云、確説いまた聞へす

二日

会津江一書を送くる

越之家老本多修理来る、聞く、小野杯云者⁽¹⁾ 松平江金子

借用之為東下すと、嗚呼、若此事実ならば、国災不日に

興らむ

夕刻、橋公江参上、春嶽殿二拝謁、薩州之話申上

三日

高崎⁽¹⁾左兵衛来る、歌道深意を談す

山宮⁽²⁾より之賜あり、猶微意を申す

会藩数人来訪、皆兵理を談し事実二及、其誠

実可愛可悦

四日

会津家より数人来る、大兵を談、上田伝次使として来る、

賜あり ○薩家より同断、岩下江明日は在番之趣

申遣す、上布・菓子薩侯⁽⁴⁾より為悦差越す

○対州侯⁽⁵⁾より千疋為悦到来

○会津侯物頭已上、束脩として包銀三十錠ヲ送る

五日

近藤勇⁽⁶⁾・土方歳三⁽⁷⁾江五百疋、山本覚馬⁽⁸⁾江五百疋、佐久⁽⁹⁾

間格次郎世話いたし呉候為挨拶とし遣す

○秋田稲人来る、当時京都之儒官二被召出候趣、

(1) 高崎正風(薩摩藩士)か

(2) 山階宮見親王

(3) 会津藩公用方

(4) 島津茂久(薩摩藩主)

(5) 宗義達(対馬藩主)

(6) 新選組局長

(7) 新選組副長

(8) 会津藩士 佐

久間象山門下

(9) 象山遺児

種々之話あり、小拙か見解を云

○山階宮より御常用御煙草盆、御心裏を表し

御口上にて賜ハる、此日下坂

六日

登城 諸官漠々濛々、伊賀殿は御逢無之、窃二聞く、

少しく御不例と云、又聞く、美濃守殿近々関東江御用向にて御帰

りと云、或は聞く、芸州一地之日雇并雇船にて月々御入費

三万四・五千と云、是司農頭小笠原氏之説也、大低此急危

之時二当つて用らるゝ者は小人、聞かるゝ者は亡国之小策而已、

殊二可怪、此会に入らされは知る事能ハす、唐津之小倉⁽¹³⁾

江移りしは、芸地に札を建て唐津之奸物を謬せむと、是

より其憤を遁れ、小人其間二説を成して小倉江去れり、今

此閣老之信する所は、狎邪之小人塚原⁽¹⁴⁾・木下⁽¹⁵⁾・小野⁽¹⁶⁾・肥田⁽¹⁷⁾之輩数人

に過ぎす、天下之目在る者は是を知る、諸官は恐怖して不知、

知る者三・四輩に過ぎす、知れ共いふこと不能は、力足らざる也、鳴

(10) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

(11) 稻葉正邦(老中
山城淀藩主)

(12) 小笠原広業(勘
定奉行)

(13) 小笠原長行(老
中 肥前唐津藩世
子)

(14) 塚原昌義(大目
付)

(15) 木下利義(大目
付兼軍艦奉行)

(16) 小野友五郎(勘
定吟味役)

(17) 肥田浜五郎(軍
艦頭取)

除⁽²⁾

呼終に国家を誤る、小拙反覆して唐閣之不明をいへとも、

聞れさる而已成らず、^(へ欠カ)かつて小人之惡み忌むこと甚盛なり、

豈是等に意あらむ哉

七日 無登城

八日

賀州閣老江参上、云、当今第一等之御所置は、狎邪之小人⁽¹⁾

三・四輩を謬、天下ニ謝せられむを以て、皇国人民之心腹を得

るにあり、然れとも外藩は能く此事を知る、諸官は兩三輩に

過ぎす、且会家いまた是に及ハす、大英傑にあらされハ能ハさる

へし、第二は、速に長防之地江討入、彼か実情を得て置するに^(勉欠カ)

寛大を以てせられむこと、徳川氏宿世之仇を結ハす、且今

国財旦夕に逼、大邪既二金を払郎西に借るの策あり、極めて

如斯なるは、彼か術中ニ陥り、国家之瓦解日を卜して察すへ

し、其他云々、又云、能を拳任賢するは殊ニ急務なり、

是戦ハすして敵の鋭を折る、会家微臣か此説に服す、

(1) 板倉勝静

(2) 本文「謬」を訂正したものか

此日、江戸より為替金千両之証文着

一日も置くへからず云々、大低容るゝか如しといへとも力足らず、且諸方之臂を引く者其中間ニ災して一事も行ハれざるへし、時成る哉、邦家の崩るゝ

九日 登城 漠々然 此日、大久保某と云監察芸地より密事

言上に帰阪、⁽⁴⁾ 宍戸備後介は伯耆閣老其国江返せしと聞く、

伯州は畏縮して兵を進めず、半信半疑歟

十日 雨 登城

⁽⁶⁾ 稲葉閣老御逢被成度旨二付、営中にて第一・第二之愚説

を申、悉く解せられし由、此老性質極而美といへとも、力足

らざる歟 ○肥後之券、新助国許より来る、明日江戸留守

宅江向出立横井・長谷川より伝言あり、云云、⁽⁷⁾ 当今之形⁽⁸⁾

勢は邦内干故を動かすへからず、富国之道尤先成るへし、⁽⁹⁾

況哉名節不当之征長、尤以て四分五裂を促す之徴なり、故

に肥後之出勢は、軍帥下津九右衛門且小楠之弟子宮川小

源太を出たして、専ら内政之議言上ニ及び、敢て戦争之事に

(3) 大久保帯刀(目付)

(4) 宍戸璣(長州藩士)

(5) 松平(本庄)宗秀

(6) 稲葉正邦(老中山城淀藩主)

(7) 横井小楠

(8) 長谷川仁右衛門(肥後藩士)か

(9) 下津休也(肥後藩士)

及ハす、我輩之出世を待つ云々之伝言あり、肥前は先月

廿六・七日迄は出勢なし、其他之大藩また然りと云

十一日

○会藩林三郎来る、微意を話す、彼頗る解する所あり

○滝川播摩江、小拙弱身に成御用立難く、空く二千石を

忝するは誠二本意ニあらず、帰府退職之事言上を

頼む、且不平あるにあらず、当節御用途莫太なり、我か

力を計らすして安閑と其職を忝するは、実ニ恐懼之至

なり、本意上辺江貫徹成す処、深く頼む所也と云

○伯州閣老御糺問之由御書付を見る、頗る御失体成るを

知る、両三輩江愚存を云、且別ニ記せしものあり

十二日 登城、為替金受取

十三日 登城、無異、用兵寛急之利害を小記し、御側室賀

作州江示す ○紀州之船は実次郎江頼ミ、留守宅江一封を寄す

十四日

(1) 滝川具挙(大目付)

(2) 室賀正容(御側御用取次)

○会津家江一封を寄す、我か御暇之事を願ふ

○⁽³⁾広沢富次郎来る、我か内情をいつて、退職之事会侯より言

上を頼む ○清三郎来る

○⁽⁴⁾久留米侯より氷製器到来、即刻会侯江呈す、聞く、当月

三日、長人豊前内裡^(大里)之地を攻撃し焼払ふ、小倉勢敗走、

且諸家之渡船七、八十艘奪取らると云、是久留米侯之近臣

使之者目撃せし処の話也

○薩州より幕府江呈せし趣意書を以て 御所江

差出せし由、会家にて大心配なりと聞く、或は聞、是

幕府江差出置たりし、強而御返却二及ひし故也と、我此事に

附て言上頻なりしに、終二狎邪之妨を得て、其意達せ

ざるを知る ○此夜、室賀作州江行く、作州は年

若なれとも頗る人物、尤可賞可頼也

或は聞く、伯州之事、初め唐津芸地にてハ所置宜敷に

出たりしに、⁽⁶⁾宍戸某召捕之事、⁽⁷⁾橋・会両公より頻二督責

(3) 広沢安任(会津藩公用方)

(4) 有馬慶頼
(5) 松平容保

(6) 宍戸備後助(磯長州藩士)
(7) 一橋慶喜

せられ、且小邪之小臣是二結て忠諫容れされず、終二爰

に及び、芸人之望は勿論、長人大二憤り、死を決して

一致二及びたりしかは、唐閣⁽¹⁾殆十計尽果たりしに、

伯州外国之事にて此地に到れしを談らひ、己か任二替らし

め、且芸地之人氣、宍戸之転末等、寛解に秘談ありし

を以て、伯州追々其轍を以て、所置今日二及びたるなりと、

然るに愚懵と狎邪之輩、国家之乱を好む之余り、悉く

其罪にあらざる罪を以て伯州二歸し、終に今日二及びし

なり、唐閣は己之非を掩ふて小倉江到り、邪佞に

迷ひて国家を誤る、嗚呼可歎哉、これ等作州之密

話なり

十五日 滝村⁽²⁾小太郎来る

憂深き者は、其見厚く遠けれハ也、危急を不察、一日

に苟且安佚するは、僥倖を頼ミて無識なれば也、今天下廻

らず、一時も忽にすへからざるものあれ共、漠として講せず、乱

(1) 小笠原長行

(2) 勘定方

薩州之蒸気
船二艘、兵卒三・
四百人上京すと
云、諸官之驚く所也

階弥堅く、四分五裂之勢成る、豈此輩と共に悠々たらむ

哉、三諫で身退く、時勢を詳にし、動くへきに動き、退く

へきに退く、我力此大破を救ふ不能、力足らざるにあらず、

臂を引き機を忌み、務て我を退けむとす、一日は一日

より甚敷、憤懣日に盛にして、胸間日夜二逼る

窃二聞く、大君御不例亦甚敷と、殊二可歎、皇天之

憐を垂るゝ不速ことを、たまゝ有志輩あるも、猜忌を憚

り口を開かず、是其見小にして大小軽重之分別たち

かたきか故なり、狎邪は時勢を不察、末枝をとつ頗る

翱翔す、何そ其愚邪之多くして賢達之少き哉

十六日 大江丸四国より帰坂と云 ○御側赤松⁽⁴⁾、江戸江急御用

十七日 登城 大君御危篤之御容体を聞く、睨不可信

此日、一橋公御下坂 ○芸地より永井主水帰坂、生悠々不断、

不可頼 ○小倉より監察小笠原某下坂、唐津臣長谷川氏

帰る、聞く、諸家之兵、唐閤之命を不報、長地にて御米^廻

(3) 徳川家茂

(4) 赤松範忠(側衆)

(5) 永井尚志(大目付)

六千俵引揚、并庄内・越前其他之廻米を止めて下坂を不免、

大二困迫すと云　○宮中空議

十八日　登城

窃二聞く、小倉にて内破之徴あり、唐閣之臣尾崎嘉右衛門

事を専らにし、監察平山健⁽¹⁾と腹を等敷し、私を掩ひ諸

卒を怒らしめ、己れ衆に抽て事を執らむとすれ共、皆不服、

閣老は知れ共私不能敷、又不知敷、小倉之衆も又感せざる

者多しと、誠二悲歎之時也、嗚呼小人之天下を誤る、古より

しかり、況哉今日撃するに於ておや、臣百方建言すれ

とも終に聞かれず、恨を吞て一日を過く、^{終二}退職之事二及へ

とも、また不断、殊に痛へきは、

君上いまた御快方之事なし、幕府人物なき如此、豈宜く

百年之公評を遁れむ哉

十九日　登城

今朝、内変殊二切迫、憤懣二堪へざるものあり、呈建白云、

(1) 平山敬忠(謙次郎 目付)

○当今御国勢甚切迫仕、此上大災到来候ハ、御挽

廻之機如何共不可成、四分五裂之形顯然と相固

可申候、御国内之事は一時も被差置難く、御重事

若哉一朝侯伯一統仕、御所置之不可ヲ申出候ハ、如何

之御詞ヲ以而是を御弁解被遊候哉、必らず御遠大

之御大策は被為建候御義と万々奉存候へ共、小臣日

夜悲歎ニ不堪、不顧恐肺肝ヲ不包奉申上候、

結兵より既ニ一敗而已、敢而士者吐気候程に御手

立不申、此故ニ内部紛々悉く情氣ニ陥、猜忌益

盛ニ、おのつから自敗之形相見申候、今御軍艦も両三隻

は運動も仕居候由、願ハくは小臣江乗組被 仰付候ハ、

右御艦ヲ以て彼か要所ヲ攻撃可仕候、就中歩兵

隊は殊ニ御用立候趣、内地よりは二・三隊ヲ以て敵敷

御打入、一勝之御算相立候上、天下之人情且侯伯

之異見等以御平心被為聞、寛猛御至当之御所

置ヲ以て被為渉取候ハ、四・五十日ヲ不出して西国之

紛擾は御鎮撫可相成歟、尤惣督被為命居候御

事故、当御地より彼は御所置は難被遊候義とハ

存候へ共、内地之人氣且不可言之形勢も御座候

間、猶又小倉表江副督⁽²⁾之御方御下り御座候共、

敢而御失体とは不奉存候、臣愚僻身分を

不顧申上候は恐入候へ共、痛苦ニ不堪奉申上候、以上

寅七月十九日

是我か第三等之説なり

大君御容体以て之外と聞く

廿日 登城

君上御重事、殿中謹然、敢て議なし一書を呈す、云

小臣窃ニ悲歎仕候御事御座候、当今結兵終ニ御勝利

を不聞、然るに悠々時日ヲ消シ、終国難を来し成候折柄、天我

君上之御為ニ愛憐ヲ降さる時は、誠ニ不可言之形勢と相変

(1) 徳川茂承(紀州藩主 征長先鋒総督)

(2) 水野忠誠(老中駿河沼津藩主)

可申候、若哉 君上御病床御重事ニ被為渡候ハ、万緒

先御後見之御事故、速ニ 一橋様江悉く御任せ被遊、暫天下

之變動ヲ御覽被遊候御儀と奉存候、然る上 君上は小倉

表ニ停泊仕居候御軍艦ヲ以て江戸江還御相成候御義と奉存候、

当地は、天下之變ニ因ては何分如何可相成哉、実ニ難計

場所と奉存候間、篤く御熟考被遊、御果決尤御急務と

乍恐奉存候、若陸路 還御ニ相成候ハ、天下之人心当

節薄水ヲ踏候折柄、如何様之混乱相促可申哉難計、深

掛念仕候、存附候所、極御内々入御聞置候、以上

七月廿日

猶其大趣意之有る所、以口上反覆言上、終ニ不被聞、

御継統一途ニ決す、故ニ国事は御擲捨之形、必らず災ヲ起さむ

廿一日 登城、空儀(儀カ)而已

廿二日 休

聞く、本日 一橋様御下坂、大御番組并歩兵、芸州

并小倉江被遣と云、嗚呼何事そ人氣益不奮

廿三日 登城

聞く、当十三日石見長人之襲ふあり、味方攻せず、同敷十五・十六日の兩日攻襲せられて大敗走、浜田城下二逼らると云

一橋様御上京、伊賀殿同断

松山藩安東収蔵来る、聞く、四国辺諸家の出勢未タ

不出、松山は大島敗走之後、国財不統、殊二長之攻襲

を恐ると ○監察話二云、小倉にて唐閣困迫、然る(ニ欠カ)

言を寄せて云、輕拳盲動せず後大挙之意也

と、監察輩是を笑ふ

京地薩之人数多勢上京、大久保一藏、⁽¹⁾

一橋公并関白家建白あり、風聞喋々たりと⁽²⁾

○御側室氏⁽³⁾か言二云、明日帰東、当今之

御継統之御使なりと、夜二入、一書をよす、大意二云、天下

(1) 大久保利通(薩摩藩側役)

(2) 二条斉敬

(3) 室賀正容

之重事は権謀術数之能くする所ニあらず、願ハくは一箇
之誠字を以て所せられむにはしかしと云

当地之決議、御大統之事は、

橋公、御養君ニは田安殿之御子亀丸殿可然と

云議なりと、義邦今世之人氣を見るニ、蕭牆

不断にして人物なし、加之二猜忌あり、私営あり、下民

困迫し上下費弊す、災近きあらむ歟不可知、誠ニ危急

存亡之秋なり、然るに愚か如きは一事も採られず、忌嫉歟

偏執歟、大厦之傾一木之支ゆる所にあらず、見聞之及ふ

処一も悲歎を増さゝることなし

廿四日 登城 ⁽⁶⁾ 此夜山本角馬会公之使として来る、拙引止らる、
^(寛)

早朝、室賀氏より使、来るへき由申越す、即刻行く、内事を

談す

美濃守殿江、四分五裂遁るへからず、かく悠々御決議なき⁽⁷⁾

時は終ニ如何、小臣悲歎ニ堪へず、是を見るに忍ひず、願

(4) 田安慶頼(田安
家前当主)

(5) 田安亀之助(慶
頼子息 のち徳川家
達)

(6) 山本覺馬(会津
藩士 佐久間象山門
下)

(7) 稲葉正邦(老中
山城淀藩主)

ハくは全禄を致して田舎ニ死せむ、一戦を懇願すれども

嫉忌甚敷旁議ニ妨けらるゝ歟、或は小臣御疑有る歟、

悉く御擲捨、また事情を言上すれば其間なし、

然るに悠々消長日は、如何そ本意ニあらむ哉云々

和^①
□宮之御見実ニ可驚、

大君江之御書中、御仁徳を以て万民御撫育在るこそ御

職掌之御当然云々之御事ありと云、是窃ニ某ニ聞ける

所、更ニ虚言ニあらず、某感涙して小臣ニ密話す

廿五日

本多修理・青山小三郎来る、会公より春嶽上京之事頼ミ越す

趣言上、異見内談

聞く、江戸にて払郎西人幕府を助けむとし、しはく逢接ありと、

長崎にて五代才助其両三人^④払人ニ逢ふ、云、今英之長を助くる

もの、其求むる所急なれハ也、薩之長を蔭助するは大道に

於て違へり、如何之心得にやと、言塞ると云、今哉内属相喰

(1) 徳川家茂正室
親子内親王 のち静
寛院宮

(2) 越前藩家老
(3) 越前藩士

(4) 五代友厚(薩摩
藩士)

て餓虎喝狼之遺肉を余す、そも／＼何之識そ、また何等之拙策そ

○石見⁽⁵⁾浜田之城主は雲州江退去す、雲州・因州之諸勢皆

国江引返し、境を守て攻襲を防禦せむとす、彼か兵は寡少にして皆散兵、終に大敗走、一国支ゆる者なしと

○水戸人所謂竹田・大場⁽⁶⁾之徒、漸く起り、いまた形に顕れすといへ

とも根深く覆故を計る、旗本之衆茲二同意多し、此

三年前志を得たる朝比奈⁽⁸⁾ (ママ) 之徒大二恐る、近日暗

殺之事計りかたしと云

○奥州御領之一揆盛なりと云

窃二聞く、御征長之前、肥前より因・備・浜田・津和野江使者を通し、出勢無用之談ありと、因・備は半信半疑、浜田は不同意なりしか、終二今日二及へりと云

○江戸より来状、云、奥州伊達郡飯田山^(半)辺より百姓一揆蜂起、御代官所不残破却、夫より追々桑折・瀬ノ上・福島辺所々

(5) 松平武聡(石見浜田藩主)

(6) 武田耕雲斎(水戸藩もと執政 元治二年二月四日刑死)

(7) 大場一真斎(水戸藩執政)

(8) 朝比奈弥太郎(水戸藩もと執政)

破却、二本松・三春・相馬・福島・仙台、右鎮撫被仰付由、

奥羽は季候寒冷、当年は必らず不作之見込、人心甚

恐ると云

山本角馬・滝村小太郎来る、一勝之戦を議す

廿六日 休 岩田半太郎、大甲丸にて小倉江出帆すと云

紀藩三輪三太夫来る、聞く、紀家近年 公辺より安

藤江御家之事取るへき旨被仰出ありしより、狎邪小人拔

扈、有志之輩悉く擯斥せられ、頗る泰平なりしか、此節

安藤、石見に紀公之御名代として兵三千を率て出たりしに、

大敗軍、実は夜中、山上に陣せしに古井二汲落たりし響、炮声ニリ〔類せしを聞誤り、大陣敗走ニ及ひしに因と云

御家之議両派二分れ紛々たらんとすと云

嗚呼、去ル子年以來、太田道酸(3)・諏訪因州(4)・松前豆州(5)・

酒井飛州之徒、御国家之大政を不察、漫二旧弊小節之

御所置を主張し、士民を殺戮し、無能無職を挙げ、

言路を塞きたりしに、其弊忽ち三家二及ひ、今日にして

(1) 岩田通徳(目付)

(2) 安藤直裕(紀州藩付家老)

(3) 太田資始(もと老中 遠江掛川藩前藩主)

(4) 諏訪忠誠(もと老中 信濃高島藩主)

は勢如何とも不可廻、然るに猶旧弊無識を退けず、口才を

巧にして一日を固くするものはいかむそや

廿七日 休 江戸江出状并大関江一封を寄す⁽⁷⁾

備前藩花房席太郎来る⁽⁸⁾

廿八日 登城

廿九日 登城 建白二云

臣愚恐懼不堪悲歎奉申上候

大凡天下之重事は、闔国之人心折合不申候ては、終二

不成、反て紛擾と相変可申候、此間私心相狭^(狭力)、公平

至当相欠候ては、上

天朝・幕府之御命令二御座候共、被行難き所御座候

是あからさま二御拒不申上候共、人心徹底不致候所より

終二乱根を相固申候、今日之御急務

上様御病床重事之折柄、万緒之御任⁽⁹⁾

一橋様江御任せ被遊、一と先 還御之御沙汰二御決

(5) 松前崇広(もと老中 松前藩主)

(6) 酒井忠毗(もと若年寄 越前敦賀藩主)

(7) 大関増裕(海軍奉行 下野黒羽藩主)

(8) 花房義質(備前藩士)

(9) 徳川家茂(七月二十日死去、八月二十日まで喪を秘す)

定相成候哉二も薄々奉承知候、然るに

一橋容易此御大任御引受不被遊候は、乍恐御尤千萬と奉存候、何分是迄

一橋様御補佐之御助力も貫徹不仕、且関東にては当御地之情実も不相分候処より、此間浮説も紛々承候儀も有之候、是諸有司、御邦内且為御家に小忠あるか如く二候へ共、其実は邦家二可尽

御職掌之大忠二不附心、旧弊二相泥、天下御變通之御所置二於て未夕了解不仕候故哉と奉存候、此際に立到り候ては、御邦内は申までも無之、御家臣之面々一致、一片之誠心を以てひたすら

一橋様御委任被遊候様奉懇願不申候ては、決而御承引も有御座間敷、且は各々一致奉御命令不申候ては、邦家之御万解は乍恐万々無御覺束御儀と奉存候、附ては 京師江御懇願之御筋等

は尤御急務と奉存候へ共、猶又関東

大奥之御深意諸有司之赤心篤と被遊御聞届、

内外上下一致之所を以て、一同懇願仕候御儀二相歩ヒ

候ハ、如何哉と^{奉存候、}乍恐一時以御威光御押江被遊、或は

以 朝威御示遊され候とも、其実御誠実相欠

候ては、終二紛擾之基と相成、将々

一橋様二於ても御充分之御指揮遊され難き御場

合も可有御座哉と奉存候、小臣御内々御決定をも

不奉存、漫二犯機忌奉申上は、其罪難計候へ共、

不堪黙止、窃二微衷奉申上候、謹言

寅七月廿九日

晦日 登城

青山小三郎来る、聞く、去ル廿七日嶽公上京、

橋府其説を容られ、甚都合宜敷かりしか、廿八日⁽²⁾

より終二又反し、唯路旁之看を以て被為対、

(1) 松平春嶽(越前藩前藩主)

(2) 一橋慶喜

嶽公憤懣二堪へず、安危を徳川氏と共にする

歟、一度押而帰国し後來を見る歟之ニ途決心、

譴責も厭ハさるの旨趣なり、当地家臣今より登

京すと聞く、京地不穩、長人も潜伏せり、必

らず一乱を生すへき形勢なりと聞く

芸地は四十八坂を越へ、宮島辺長人充つ、勢

尤盛なりと云

稲葉閣老江咲虚私言を記して呈す⁽¹⁾

八月朔日

此日 上様御重症、万一之節は

一橋様御相続、且至急二付、長坊江御出陣之趣被^(助)

仰出

二日

三日 此日より風邪引

一橋殿江御供之向々悉く銃隊二組立被仰出、并銃手

(1) 稲葉正邦(老中山城淀藩主)

之外無用之者召連申間敷旨

四日 近日御番方其他合併統練之制被 仰付、人心

五日

六日 蕩々、聞く、江戸にても御軍制掛出来、小給之者

悉く小筒組二割入之風説あり

七日

八日 此夜曉より嵐 紀藩⁽²⁾津田監物来訪、征長

九日 之説大低同意、其国中大改革可被行候旨

内話、且同藩岸加一郎上京二付、川勝⁽³⁾美作江

一封遣す、聞く、小拙之事悪評紛々、一も被容

へからさるの勢ありと、監物笑話す、又聞く、先日

紀州公より、小拙を以て芸地江出張歟或は同家

御拝借被成度旨、去ル上官江御願之所、御答ニ云く、

其義尤可然なり、しかれ共彼か如きを以て御採用

あらは、往々為中納言⁽⁴⁾殿如何之御事可生哉難計

(2) 津田正臣(紀州藩士)

(3) 川勝広運(大目付)

(4) 徳川茂承(紀州藩主 征長先鋒総督)

といふを以て故障せり、故に我か家藩ニ於ても子か

旅宿江立入を嫌らふ甚敷機忌あり、誠二小人

之情体可恐なりと密話す

長人は当節く(玖波)バ迄退けたり、宮島にも足を

止めず、然れ共備後尾之道江出つる者在り、歎息

之事共多しと、井伊・榊原も当節尤憤烈せ

りと云

九日

戸川伊豆来る、聞く、還御は 大葬御発之上

海路と決せり、然れ共 橋公十日当地御着、十二日

御発駕、其後御布告之旨御内命ありと云、其

儀心得居可申由、伊賀殿(2)之命を伝ふ

橋公は尤御憤発、是非征長御成功之御見込

なり、春嶽より建白あり、其略は当節之御事

明二長州江御告、御解兵可然、其上御継統ニ到而

(1) 戸川安愛(七月二十六日大目付就任)

(2) 板倉勝静(老中備中松山藩主)

は、自他之無差別、

天朝之御定ニ可任云々なりと

窃聞く、当地之上納金既三十万、御在合三・四十万、

又本願寺より五十万を納す、此中四十万を以て

橋府江献し、残は其他之御所置ニ充らると云

十日

紀藩蘭田彦太郎・山本右左輔来る、明日国江

帰ると云、同人輩専ら此機会に乘し、国政改

革海軍興起之趣意なりと云

十一日

松本良順来る⁽³⁾

肥後藩宮川小源太来る、聞く、国論同属相喰を⁽⁴⁾

不好、幕府之基本立たざる時は、皇国為ニ蹂躪

せむ、三・四ヶ国申合、共々皇国之御為を以て、征長其他

之不可を言上せむとす、将タ小倉之兵は悉く引揚、

(3) 西洋医学所頭
取
(4) 横井小楠門下

敢而無名之御示令二応せざるへしと、柳川家殊二憤発、
専ら此説を以て唐津江云、然るに容れず、紛々たる
拙議而已、肥前も云、当今一国を守るへからず、共二与
に国家之安危を以て進退せむ、是迄独任せしは
尤誤れり、衆議を以て国家の不可言上せむと云と
戸川伊豆来る、聞く、先月廿七日長人小倉を襲ふ、細
川家と一戦、死傷多し、細川家江討所廿七首級、御軍艦
は下ノ関江向て放発せしに、此所頗る無人、小倉より引返
す者あり、其内回天丸は長崎江引退く、富士丸は猶
放発せり、其内小倉之長人引退きたりと云、其後廿九日
頃にや、肥後之兵引退く、續きて諸家之兵もまた去る、
唐閣⁽¹⁾は如何之御所置にや、小倉を捨て富士江乗り
長崎江去れりと、当月四日長崎江御用向にて行きたり
し村越⁽²⁾三十郎蘭船江便して昨昼帰坂、つふさに其
転末言上、且唐閣よりも建白あり、大意は、不肖とても

(1) 小笠原長行(老
中 肥前唐津藩世
子)

(2) 目付介

訛伝也

始終之所置無覺束、孰人か代りて其御所置を仰く

云々の意なりと、是を以て昨夕板倉閣老单身

上京、橋公江言上之積なりと

又、宮川二聞く、先月廿九日、長人伊予松山江使を立て云、

先日以来之返報可致也と、同日小蒸氣に駕して

松山を襲ふ、放火一時計り也と

酒井十之丞来る、聞く、京地にて当月初、公家衆⁽³⁾

惣御参代、時に親町三条家衆⁽⁴⁾、^(ママ)傳奏^(正脱カ)席を進て云、天下之

大事は微臣之伺知る所にあらず、窃二聞く、

大樹公も不測之御事あり、且諸侯進まず、此機会は

先御解兵然るへき歟、其上諸侯を会し、衆議一定

之上、正大之御所置あらは如何と、殿下より一同更二答ふる

者なし、独り山階宮、其申所頗るいわれあり、漫

に解兵は殊に不過なり、^(可)宜敷大樹公之御変を以て

明白に御達しあり、蒙動を止められ可然歟と、此日は此

(3) 越前藩士

(4) 正親町三条実
愛(議奏)

(5) 二条斎敬(関白)

(6) 晃親王(国事御
用掛)

議にして止む

一昨日歟、山階宮 一橋様江御参殿御出之事被仰
遣れしに其御事難叶、禁中にて 拝謁可仕旨御答
あり、故二 山階宮も御参殿、頻に御前説御話ありし
に、橋公唯今解兵は難叶、先彼か足長二出候を

討て、其国内江押込、其後寛大之御所置は、某か

懇願可侍心底なりと御答ありしと云、其後禁營

御暇之式、

御簾を揚られ親しく御言葉ありて後、征討成功

可致旨なりしと、其跡公家衆議二可及命旨なりしか、

衆皆三条殿二向て、過日之御議如何、今日猶御議

あるへき旨なりしに、三条殿答て、

叡旨既二如斯、臣豈其後二議する所ならむ哉と御答
にて、終二其議なしと

春嶽殿過日已来之議 橋公并老中江申建られ

し所、暗に此 山階宮 正親町三条家之説と符

愛
(1) 正親町三条実

合せり

十二日

紀藩岩橋鐵輔同人弟舒輔来る、聞く、当五日六日七日は長州

より芸地江兵を出たし、太二襲攻せり、格別敗

走もなき哉知るへからず、八日嵐に乗して井伊・榊原両

家を襲ふ、両家敗走

十三日 (2) 伴鉄太郎、大津より引歸せし由にて来る

会津藩広沢江一書并詩作を送る 轍輔云、紀殿之

上言は、其大意紀公は芸地にて死を決せり、

橋公は御動座然るへからず、京地にて御決心可然云々也

○会藩は皆云、九州口破られたり、芸地よりは小倉表江

橋公之御動座なき時は大事二可及と、懇々として此議

を主張す、或は聞く、若州雲伯之地方江長之蒸気

出没す、又風説二は丹後田辺は既二攻られたりと云、其信疑

計るへからず

(2) 軍艦頭取

(3) 広沢安任(会津藩公用方)

十四日

伴^(マ)

昨日

聞く、一昨、唐閣長崎より富士艦にて兵庫江着、直二上

京ありしと、嗚呼唐津狎邪之小人、塚原⁽¹⁾・木下⁽²⁾・小野⁽³⁾・肥田⁽⁴⁾・平山⁽⁵⁾

其臣尾崎輩を信用して終二邦内之一大事を来たし、

小倉を追れ長崎江遁れ、また再上京して何等之言

をいふや、此人之御所置にて大私公平之御政見るに足

るへし、恐らくいまた至正に出へからず、殿下并

中川宮⁽⁶⁾・会津⁽⁷⁾・桑名家規模狭小にして、又加之

橋公之御附原⁽⁹⁾・梅田^(マ)之輩私念盛なり、賢を妬し

能を憎ミて、敢て此際直言する者なし、微臣懇々

切々として上言数章二及へとも、反て是か為二嫌疑

せられ路旁二擲たる、其後御所置あらかしめ

知らるへき也

或は聞く、当五・六・七日頃にや、小倉城攻襲せられて、終二

彼か有と成れり、何事と、小倉主拾五万石を領して

(1) 塚原昌義(大目付)

(2) 木下利義(大目付兼軍艦奉行)

(3) 小野友五郎(勘定吟味役)

(4) 肥田浜五郎(軍艦頭取)

(5) 平山敬忠(目付)

(6) 朝彦親王(国事御用掛)

(7) 松平容保(京都守護職・会津藩主)

(8) 松平定敬(京都所司代・伊勢桑名藩主)

(9) 原市之進(橋林家臣)

(10) 梅沢孫太郎(同右)か

防くこと不能、恐々として如斯ならば、豈能く諸侯といわむや、当今若戦勝者あらハ、必らず敵譴を蒙らむこと必せり、邦家之侯伯悉く貳百三百之賤卒之為に蹂躪せられざるは殆と稀なり

○此夜、京都滝川播磨・川勝⁽¹¹⁾美作より

一橋様并伊賀守殿小拙江被 仰付、至急之御用向有之

候間、不快二候とも押而上京可致旨御用状到来、暁刻出立す、但戸川伊豆江右之趣相通置く

十五日 ○此日 一橋様・賀州共殿下江御出二付、出館二不及旨被命有之

淀堤崩れいまた出水故、船止まり居候を以て、陸路

上京、夕刻着、伊賀守殿・川勝・滝川・大久保⁽¹⁴⁾江届手

紙遣し置、御沙汰次第出館之積り

十六日

会津家江昨夜着之趣、且此度為御用上京之件々申遣す

一橋殿江参館、夜二入御逢、長防江御内密御使之事

(11) 滝川具孝(大目付)

(12) 川勝広運(大目付)

(13) 板倉勝静(老中備中松山藩主)

(14) 大久保忠恕(京都町奉行)

御沙汰有之、当節議論紛々、此日

朝廷江被 仰上之御事有之、忽ち御決定

十七日

参館、御使二付心得之簾御伺、即以 御直筆ヲ以而

御聞済、書付御下ケ、同夜下阪 書付下書別ニ有之

十八日

大坂着 美濃守殿江趣旨并御沙汰之事言上

此日聞く、江戸より鉄船昨日着之趣、同船にて芸地江参る

へき由御沙汰

十九日 登城

上様御大切之事被仰出 同夜兵庫江下たる

廿日 大江丸乗組江肴料^(ママ)火焚・水夫江八両 鉄船江同断^{同断}
土官江五両

鉄船江乗組出帆 監察織田氏同船⁽¹⁾

廿一日

御船用達中屋新助方江一泊

○広島着、紀伊殿・出羽守殿江参上、愚説皆聞かる

(1) 織田信重(目付)

(2) 徳川茂承(紀州藩主 征長先鋒総

督)

(3) 水野忠誠(老中

駿河沼津藩主)

○芸州御家老野村帶刀・辻將曹帶刀は上阪之由

用達寺尾清十郎・上田音次郎(5)是等機密尽力する者

芸藩沢英左衛門・中村熊藏来る

当地之兵卒委靡して振ハす、議者多くして悠々日を消すの勢あり、小吏此際猶旧轍を以て万事遅回す

廿二日

当地之家老辻將曹江一書差遣す、用達面談いたし度趣

申遣之所、午後植田乙次郎来訪、長人江達し之儀相談云、

芸州侯より小拙(6)来り面会御趣旨可達趣一応長州江申

達、其上彼来る歟或は我行く歟之事ニ可及、岩国は万事

宗家江聞かざる上ならては決答なし、しかす、徒に山口ニ一書

申遣し、其上は返答次第進退良成るへしと云、此議ニ任す

○沢英より侍耆人遣す

○近藤熊吉来る、船中江看遣す水夫江八両
土官江弍千足

廿三日

(4) 辻維岳

(5) 植田乙次郎(芸
州藩士)

(6) 浅野茂長

辻将曹江岩国之使督責之事頼遣ス、答ニ云、既ニ昨夕

一書差立、猶今曉使節同所迄遣候間、右之答次第小拙出

張ニ可及旨委細申達せりと云

○明石藩松村勇蔵来る

本日

上様御太切之事、表向御達有之⁽¹⁾月代は追而御沙汰、普請・鳴物は廿日より停止之旨被仰出

織田氏来訪、明日帰坂之事相話す、川勝・滝川江当地并

山口江之通達、当太夫殊ニ尽力之旨申遣す

○夜二入、辻将曹太守之使として来訪、猶当今之情実

内話有之、小拙出張は明日迄見合可然旨申聞

是迄長人之戦争は、官軍向ふ処ニあらされは敵対せず、且

境界江出勢之時は、必らず当家江其事を以て告げ、敢而猥ニ

乱妨之事なし云々之内話あり

廿四日

岩橋轍輔来る、聞く、津田監物京師にて殿下江周旋し、

(1) 浅野茂長(長訓
芸州藩主)

(2) 紀州藩士

紀伊殿江節刀賜ハるへき義を願ひ、或は

一橋様御出陣之事を以て頻ニ御催申上たりしか、此事当地江

聞へ、呼下之命あり、然るに其事ニ到らず、諸方聞合而已にて

周旋之事は固く止められたりと云、当地之諸藩内情一

致せず、委靡して休兵之事而已希ふと云

明石家之留守居松村勇藏来る、同家も困迫更ニ甚敷、引^{兵士}

去之事を希ふ而已也と

辻より書通有之、多分今夕は岩国迄之使帰り可申云々

廿五日 広島より宮島江渡海

昨、岩国江使せし者帰島、云、岩国人何分山口より之返答

有之上出張之事希ふこと切なり、何分国家之大事、岩国一己之所

存を以て接対せし後、輕輩暴挙之事あらは、宗藩江対

し申訳なく、且天下之批判如何共為すへからす云々

此夜再ひ植田生ヲ以て岩国江遣す、小拙より内家之用人安⁽⁶⁾

達十郎右衛門江出張之大意申遣す、且口上を示して云、此度衆議

(3) 津田正臣(紀州藩士)

(4) 二条齐敬(関白)

(5) 植田乙次郎
(6) 周防岩国藩士

御採用御所置二及ハむとす、我奉命して其旨趣を達す、

別二他事二渉るにあらず、且其国民頑強、我二対して盲動

し放発或は暗殺之事あるも決而厭ふ所二あらず、我是等

を以て其国論と為さず、其他旅宿道路之手当等に到

ては、無礼あるか如きは、いさゝか我か意とせざる所、戦闘使節

之礼を以て扱ハむも我か恐るゝ所にあらず、其望む所、国論

誠意を以て包含なく決答を聞かん而已、従来使節之往

来芸人之手を借るゆへに、我か示意達せず、其国之

趣旨も貫徹せざるものある歟、此ゆへに我か独歩直二其

国内に到り、眼前論談二及ハ、彼此之意貫きて通せ

ざる患なく、錯誤之恐なからむ歟と云々

廿六日

宮島之地勢を見る、長州之間牒此地二在るを察す、また

輕輩負銃して廿卅人宛渡海し彼是往来、其形象

を見る、傑然たる殺氣あり、我を見れば銃を手にし頗

る我か挙動を伺ふ、我平心を以て敢て拒ます、また
恐るゝの意なし、彼もまたあへてミたりに手をくたさず

廿七日

此夜植田生帰島、聞く、岩国にて我か押て出張を恐れ、
海浜着之節乗船せし哉と疑ひ、植田生か上陸を免さず、
彼是問答半日を過ぎたり、是此国旧来宗藩江対し

周旋之事悉く失機而已成りしゆへ、深く懲る所あり、且今度

之挙ニ於ては、輕忽あらは失策手を措く所をなきを^(ママ)

恐れ、百方して山口之答を待たしめむとするに因る、

其後役々出張、植田ニ此趣旨を申訳すと、此日また山口^(談力)

より去ル廿二日通したり書状之返答岩国江到来、当晦日

迄二両三輩機密之臣出張之旨申越、其心対すへき

の場所を談す、植田生決て周防今津之地可然と云、彼

また承伏、直ニ帰島、且便ニ属して山口家老より因備

并浜田江送くる書状を持参す、其書状写各一通芸

州江為心得送くるものあり、内見、

各一通を写さしめ、并応対晦日二取極之事共、其情

実を以て、川勝・滝川・織田氏江出状、云

扱、過日市蔵殿御帰坂之砌申上候通、追々手順も相立候二付、

廿六日厳島迄出張、即夜鯨船にて岩国表江可罷越旨

芸藩士を以て申遣候所、岩国にては従来之周旋悉く行違、

今又宗家之大事を以て私二取計候事難出来趣にて、大二困

却、何分山口江申遣候返答相待出張いたし呉候様頻二申聞候

由、然共其意中相距候^(拒力)気味は無之、唯々宗家を憚、万事

其指令二応候まで二候趣ゆへ、とても果々敷は談判整申間

敷と心痛仕候所、廿七日山口江芸藩人より私出張之事相通候

書状返答到来、弥晦日迄二（去ル廿一日芸藩より出状、廿二日

岩国着、廿三日急飛にて山口着、右返書廿五日同所着立）

機密二関候者岩国江出張面談可致旨二御座候、依之私義

同日周防今津迄出張可致と、使之者約束仕候、且差遣候

使之者江相附、長藩士より因・備・浜田江相送候書状届方相

(1) 織田市蔵（目付）

(2) 植田乙次郎

頼候由にて持参、宮島江廿七日深夜帰参候、且右書状写一通宛長人より芸州へも送候事故、内々一見、大急にて為写候間、御心得迄二御送り申上候

敵島より差遣候使之者相話候は、吉川家私門生之内当節

用人機密二預り候者も有之、右之内話にては、此度宗家より

出張之者共是迄之転末敵敷私江申談候心得之由故、内々

其心得にて出張可致と申聞候、是等は尤可然事哉と奉存候、彼か

心裡且公辺之御旨趣も貫徹不致、中間二其情を訴ふる

事不能候所より紛擾も相生、彼此之情実隔絶二及候事

故、此度は彼も可然輩出張、是等申談候義と奉存候、唯々何

様論談申出候共、今度之御趣意明二申聞候ハ、彼も判然

了解可仕歟、何れにも必らず相解候事と奉存候、其上品二

寄候ハ、山口表江罷越、飽まで正大之御趣意貫徹可為致

覚悟に御座候

此度は国家之一大事、且加ふる二道路隔候間、万事

(3) 安達十郎右衛門
門か

手間取れ候二は困入申候、乍去今十五・六日も掛り候ハ、相弁可申哉と奉存候、是迄手順仕候に、彼是十日程之消日と相成申候、此段可然被 仰上置奉願候

八月廿八日朝

廿八日

昨夜認し書状大坂江廻し方、広島表永井主水江頼遣ス

此夜吉川家執事大草終吉より植田生江来状、云、

就而被仰聞候房州公御引受場所二付、敝邑今津港二決定之

段、今田彦馬より御返答申上候て、其分御承知被成御引取相成候所、

其後薄暮頃山口より急報到着仕候二付ては、前件之一条甚

以て敝邑政府之独断不都合之至ニ御座候、其旨は、来ル晦日

宗藩応接間、岩国着之義は彦馬より申上候通相違も無

御座候所、御引受場所柄之所、防長内にては人気へも相障り、

別ニ不都合之旨も有之候間、是非共芸州表江罷出候分に

山口論定相成候段申越候、就而は何卒御乗船前二右之様

(1) 永井尚志(大目付)

(2) 勝海舟

(3) 周防岩国藩士

子申上、今夕御答振り畢竟敝邑独断之御挨拶可申

陳相考へ、勿々新湊江罷越候所、最早御解纜後にて小方

沖辺御通行之頃合と土人共申分二御座候、幾重も失敬、

何共申訳無御座候、依之態々飛船差出し、書中ヲ以て右御

詫申上度如是御座候、尤宗藩申分にては、芸州表と有之、

御城下迄罷出候様相見候所、是は当藩之御都合も可有之、

既二房州公も敝島迄御出浮被遊候事、旁以て宗藩

申分通二も参申間敷候へは、被 仰合御場所之義被仰下候ハ、

仕合奉存候、折柄敝島共可然様二も奉存候、先は要用

如是御座候

大草終吉(花押)

八月廿七日夜

再伸、宗藩人は広沢已下三人、下人共二十人位之由二御座候、

敝邑よりは宗藩人申合せ、体二寄屯人位も同船仕候様二も

可有之、御場所柄被仰聞候へは、晦日朔日頃より領海出帆之自

定二御座候

(4) 広沢兵助(真臣
長州藩士)

(5) 太田市之進(御
堀耕助)・井上聞多
(馨)・長松文輔(幹)

此度之一挙、悉く輕便簡易を用ひ、独歩して彼江出張せむと云遣すもの再三再四、ゆへに彼躊躇して議遅々すること既二如斯、況哉戦争二於ては先せすんは有るへからず、思ふへし、彼か不用意二出つる時は、主客勢を異二することを

廿九日

此日、長州之輕輩貳三十人渡海、敵島を順行す、敢而乱妨之事なし、然れ共彈装して頗る殺氣あり、窃二聞く、明日彼か執事当所に到つて面談するの約あり、彼昨年以來に懲りて其伏兵ある哉を窺ひ見る為哉と、又聞く、我独歩して彼か地方二到らは、其賤士等大疑を生し紛擾を起さむ、又此輩数千に示すとも容易く布告しかたく、若解兵之事を知らは其兵氣挫折し、再ひ憤起せしむるに難きをおもふかゆへに、地方二到るを恐るゝこと甚切也と云、是等他人より聞く所、真偽知るへからず

晦日

大坂御目付廿六日広島江着す、御所より被仰出

大樹公薨御二付、暫く休兵、侵掠之地引払可申旨御書付

持参と云

此日北風、岩国江通船を絶す

辻将曹⁽¹⁾微行して宮島江来る、御書付中毛利興丸江⁽²⁾

可達并侵掠之二字御改点之事御惣督江申上、論説⁽³⁾

しはく成れ共、惣督并出羽殿御手限御改之事六ヶ敷⁽⁴⁾

然る時は長人之尤承伏すへからさる儀なりと云て内談

懇切なり

九月朔日

今朝より長藩を待つに到らず、故二云、我豈彼を諛

て強而逢対せむ哉、晦日朔日之約なり、若到らされ

は空敷一日も過くへからず、先日以來申達儀を以て、

猶狐疑して日を誤つ如きは何事ぞ、昨年以來彼か

(1) 辻維岳(芸州藩家老)

(2) 毛利広封(長州藩世子)の長男

(3) 徳川茂承(紀州藩主)

(4) 水野忠誠(老中駿河沼津藩主)

出芸必らず永引することしはくなり、我今一新誠実

之意を以て接対するものは、独り防長二国の為而已

ならむ哉、一日も約を誤つ如き、我決して悠々たること不

能云々を以て岩国江通す、是二引違、長藩渡海

則広沢兵助・春木強四郎・高田春太郎・長松文輔⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾

并芸藩山口江使せし西本清介外⁽⁴⁾老人同道、⁽⁵⁾

窃二聞く、西本輩山口江使するは、芸地江張出し長藩を

其領地江引取らせる為、応接として行きしもの也、是は御惣

督より之内命にて、芸州一己之意二あらず、今芸地江出張

せし諸軍、去ル七日之争戦より彼に敵すへからざるを知り、且

万一一挙して広島を掩ふ時は守るへからざることを恐れて

なり、諸藩之委靡して振ハさる、用途に困迫せる、^(ママ)豈

は其号令一に帰せず、己か俟二奔走して一和せざる等

を考察すれば、少しく志ある者は皆預め其形勢を

察知すれば也、彼も又是を知れとも、隣国之拒ハさるを

(1) 太田市之進(御堀耕助)の変名

(2) 井上聞多(馨)の変名

(3) 長松幹(長州藩士)

(4) 西本正道(芸州藩士)

(5) 寺川文之允(芸州藩士)

知て、敢て芸藩と其刃をましへす、然れとも此対談

彼に弁駁せられて終二行ハれさりしと聞く

二日

大願寺之書院にて長藩二会す

一新之御趣旨演達、皆承伏、且云、汝か賤士等境より出さしむる勿かれ、或は歎願を口実して出つるなかれ云々

彼云、一橋公之賢明は元より敬服す、然るに今にして此御趣旨あるは尤可疑、從來情実之達せざる罪案之被 仰渡

等、かつて 朝廷より出てしにあらず、又 幕府に出てす、中間之奸吏彼是に周旋し命を撓て我を強圧せむとす、

故二国民一死を二国と共にし敢て顧ミす、此事情を建言

すること昨已来殊二切なり、然る我か家老(に次カ)を捕られ、二国の存亡二係る大事を以て我か倍臣(陪)に達せらる、如斯の事とも

如何そ衆人を服すへけむ哉、二国之存亡は元より期する

処、皇国内孰人か能く承服せむ哉、若

橋公早く今日之賢意あらは、事々爰二及ふへからす云々、

又石見・小倉之退去は、既二先二御惣督之御内議を以て芸藩

山口に使せしに、終二彼承伏せず、いまた其舌之乾かさるに、

是等を以て事瑣屑二渡るへからさるか為二、小子敢て強

て論説せず、唯邦内古印度之轍二陥り、笑を外人に

蒙むるを厭ふ大意を以て説得す、彼か輩知覚大二

勝れ、殆と事議を解するに破竹の勢なり、窃二思ふ、

我政府之御所置正大高明二帰せは、孰人か服せさらむ、

誰人か其指役に応せさらむ、小子か陋学邦内を成るも

横行するに足れり、況哉堂々たる政府二於けるをや、

彼か云ふ処悉く大節を持し、我か小吏之膏肓二当

たる、ゆへに一小細事は悉記する不能

昼後高田春太郎来る、先年已来英吉利二到り、帰国暗殺

せられむとし傷を蒙り、後当時二到て始めて遁れたり、何分

不文明(分)成るは殆と恥る所なり、云々の話あり、且示して、当時

大二成す有らんとするの時なり、宜敷尽力して不是を為

すなかれ、恐らく後世の批判をのかれ難たからん云々を示

談す、彼承伏

此夜広島江帰船、風潮不利

三日

昼後着、出羽殿江参る、御病氣危篤、紀公江参上、

永井氏江面会、長州逢接之大略を話す、是出羽殿之

仰を受けて也、此^夜船小船を以て川口を下たる

四日 五日 六日 七日 明石之瀬戸二達せむとして逆風雨、

危険甚敷艦を損す、払曉二見之地方江着

八日 猶逆風強し、上岸陸行、明石江到り領主之馬を

借る、兵庫江着、夜二入る

九日

大坂江漁船を以て到る、夜八ッ時着

十日 淀船にて上京、四ッ時京着、無旅宿、半田半太郎を訪

(1) 水野忠誠(老中
駿河沼津藩主 九月
十四日死去)

らふ、小倉之話あり、云、唐津侯先月末没落之折は

殊二狼^(狼力)惧甚敷、細川家之士を呼出されしに、いまた到らざる

に先き立、富士艦より迎之来るに逢て、直二引去られ、直に

長崎江出帆、半太郎⁽²⁾・平山健次郎⁽³⁾を止めて共に行かしめす、

小倉江其退散之転末を達し、荷物を所分し大低取片

付けたる後、豊後肥田^(目)江行けり、夫より長崎江赴きしに、

既二平山生之荷物・家人は西福寺二宿し、其到るを待

てりと、爰二於て、其始め没落之前微行之議成るを

察せり、然るに其非を掩ふて頻り弁説す、可恥之甚

敷なりと云 ○大坂江歸りし後は、当時二遭迎して、益

非を掩ふ、可歎、末世の風習

○細川良之助⁽⁴⁾本日京着 ○横井小楠⁽⁵⁾より七月文通

せし返書到来

十一日 出殿

聞く、当五日

御尊骸無御滯品海御着
船之報を聞く

御直に長州之情実転末言上

(1) 小笠原長行(老
中 肥前唐津藩世
子)

(2) 岩田通徳(目付)
(3) 平山敬忠(八月
二十九日外国奉行と
なる)

(4) 細川(長岡)護
美(肥後藩主細川慶
順の弟)

(5) 思想家 もと
肥後藩士

十二日 長州情実之細事を書して呈上

十三日 我か微力にして当節之大任ニ当るへからざるを述べ、退

職願書を差上、并薩人出水泉藏龍動(6)より中原生江

送りたりし書簡写、拙評を加へ呈上す

十四日 良之助・春嶽公ニ謁す、話なし、唯時候之談而已、

是は一昨日伊賀殿之仰(7)ニ、良之助對話を乞ふ、逢へき

由命あれとも、此日夜二入、殿中多事成るを以て

意中を尽す能ハす、又小人之属目を厭ふを以て

長話せず

十五日 出殿

十六日 同 以 思召、金百両御内々恩賜(8) 是は此程之勞を
思召てなり、赤松左衛門
其仰を伝ふ

十七日

柳川藩士三人小楠手簡持参、十時撰津来訪いたし度由申

聞 足達八郎・野間七郎・
武島新三郎

十八日 海軍局之小事を記す、并当節情実言上

(6) 寺島宗則(薩摩藩士)の変名

(7) 板倉勝静(老中備中松山藩主)

(8) 赤松範忠(側衆)

(9) 筑後柳川藩家老

高崎⁽¹⁾左京・村田⁽²⁾巳三郎、柳川藩三人来る、土井藩吉田拙蔵、同

紀津田⁽³⁾監物より使、普賢寺七郎使

窃二聞く 山階宮御辞表御差出有之由⁽⁴⁾ 国事

十九日

仙台藩⁽⁵⁾兩人来る、当節召に因て世子上京、内々事情

聞合之為其先に下たれりと云、富田⁽⁵⁾之手紙持参、当年は

奥筋米作大低三分、甚不作也と聞く

廿日

柳川太夫十時撰津来る、聞く、当月初旬 禁中にて

関白殿下・中川宮江対し大原⁽⁸⁾三位已下議論あり、終二

御前に決せり、大原同意之堂上廿一人云、世上當時に及び

しは、禁中事を誤られし人あるに因れりと、殿下云、我

なるかと、否、殿下而已ならずと、此御座中いまた壱人お

ハしませりと、宮仰に云、我なるや、衆云、乍恐君なりと

云々、是より後 宮・殿下ともに御辞表を捧け奉れり

(1) 高崎正風(薩摩藩士)

(2) 村田氏寿(越前藩士)

(3) 津田正臣(紀州藩士)

(4) 晃親王

(5) 富田鉄之助(仙台藩士 海舟門下)

(6) 二条斉敬

(7) 朝彦親王(国事御用掛)

(8) 大原重徳

又聞く、何れの日によ、大原三位を

禁中ニ召せられ仰する旨あり、殿下之御出仕を御沙汰

ありしに、殿下此度は御出仕之事断然として動せず、

下説ニ、此上若 宮・殿下之再御出仕あらは、大原已下は

御譴責を蒙らむ、已下之説行ハれなは、

宮・殿下は御致仕に及ハむと

廿一日 近江国勝村江使を出たして、我か祖先之跡を訪らハせしむ

廿二日 吉岡より拳銃二挺買入、代価廿六兩

廿三日

長崎より役々之家内江戸
江引揚之船一隻、兵庫江
入津、是は長州之襲攻を
恐れ、老岐殿伺之上也と云
(9)

芸地辻将曹江拳銃一挺、并手紙先月已来之礼申遣、但

当地之留守居三宅万太夫方江届方頼遣す

昨日、中里健蔵、堀石見之手紙持参、從神戸来る、越前青山

小三郎方江遣す、是は彼家にて同人雇度由、神戸警衛之

者某内話有之、金三拾兩渡たる由故也

廿四日

(9) 小笠原長行

(10) 堀親義(もと講
武所奉行)

昨日、肥前人長森伝次郎来る、石炭之事申談す

一昨長鯨船江戸より来る、小栗⁽¹⁾・塚原⁽²⁾乗組、又長崎より定

役妻子江戸江返し候者外国船にて兵庫着

○芸地辻将曹より来翰、云、

鴻便一簡拝呈仕候、冷気日増候所、先以 尊台益御静穆

御震良可被為在と恭賀之至奉存候、先頃御西下之節は

過分之蒙寵遇、重疊難有仕合奉存候、御帰坂後上国

之御模様は如何被為在候哉、取留候義二も無御座候へ共、種々

之世評不絶伝聞仕、何れと許多之御配慮被為在候御義と

奉恐察候、西辺其已来も、芸州口は過日二異ル義も無御座、

小倉辺ハ于今取合事御座候趣、何分恐入候事二御座候、偕て

先頃御達二相成候暫時兵事見合候様二との御書付、使者

差立、隣国江遣申候処、昨十九日帰着、別紙写之通申出、段々

先方にて押合も仕候所、全く書面之筋申立何分二も預置

呉候様只管申聞、不得止事取帰り、其段委細二永井主水⁽³⁾

(1) 小栗忠順(勘定奉行・海軍奉行)

(2) 塚原昌義(大目付)

(3) 永井尚志(大目付)

正様江御達仕候、尚先方之事情使之者ニ承り候所、此御

書付之義、素より疾ニ承知仕居、并ニ此書付江御添書にて、

背命仕候へは直ニ討入候様ニとの義無之哉と、使之者江

相尋申候由、素より左様之御添書付ハ出不申候へ共、いかさま上

国辺之風説ニは左様之義も相聞候付、使者出立前ニ無

岐度沼津閣老迄相伺候事も候所、左様之義は決て無

御座趣ニ付、其旨相答候所、左様なれば浪華辺にて

消たるにも可有御座と申候由、此度御書付面にては、先方書

面にも御座候通り、暫時兵事見合との被 仰出にては、真

之一時之御義ニ可有御座、他邦江踏出居候も決て掠地杯之

筋には無御座、畢竟御討懸りニ相成進退仕居候義ニ付、

又無程御討入ニ相成候義ニ候へは、要所にて踏留、防禦之外ハ

無御座候ニ付、引取候義ハいかにも仕兼、且ハ出先之者共江御書付ヲ

以申聞候共、是迄度々ケ様之御事も齟齬仕義も候ニ付、中々

速ニ納得引揚も仕間布、^侵掠地杯と申様なる御様子にては、

(4) 水野忠誠(老中
駿河沼津藩主)

御水解毒事通徹仕候にも被為在間布^(數)抔と、大概別紙

之旨趣ニ当応対中之談話も仕候旨ニ御座候、使者引受返

答は毛利筑前にて、前後⁽¹⁾応対は松原音藏⁽²⁾・広沢⁽³⁾

兵助等ニ御座候、小倉路戦争は、小倉万余程手強相成

候由話等も仕候趣ニ候へ共、其辺は委悉御承知ニ可被為在

筆略仕候、先方ニは勝様御帰坂之上、何れと御模様可被為

在、此御書付は御行違にて御達ニ相成候義ニ可有御座歟、

何分御帰坂之上之義を只管相俟居候様子ニ御座候旨ニ使

者江相話候趣ニ御座候、彼是比較仕候ても、御直ニ御話被為在、

渠も御直ニ情実申上候と信服仕候様ニ被存、表向御達等

に相成候義は兎角疑念解かたく哉と奉存候、前件は尽

く使之者江何となく席話仕候義ニ付、申上候ニ不及候へ共、

御考合ニ被為成候義可有御座哉と書加申上候、尚追々模様

申上候義も可有御座候へ共、使者帰着仕候要旨一応奉申上候

誠恐再拜

九月廿日

辻将曹

(花押)

(1) 長州藩家老

(2) 松原音三(長州

藩士)

(3) 広沢真臣(長州

藩士)

勝安房守様

別紙

弊国多年之微志一朝湮滅仕候てより、種々冤枉相連り、
今日之形勢と相成、闔国不堪悲歎罷在候、最前奉勅始末
一冊を差出哀訴仕候へ共、下情通する所無御座、遂二
闕下輕拳之罪を重候様立至、其後尾州⁽⁴⁾督府国情
御熟知御陣弘有之候所、再ヒ 將軍家御進発と相成、
続而三監⁽⁵⁾察敝国事情一々落意承知被致候も、却而小笠⁽⁶⁾
原宅岐守殿意外之御達有之哉にて、殊二前後齟齬之御
所置振二相成、加之名代⁽⁷⁾之者御拘執之次第等、廉々難得
其意、反覆歎願仕候所始末、委細御承知之通二御座候
処、其末不計も南島海孤島江軍勢被差向、数日所々
を炮撃、無辜之婦女老幼を残害シ、遂二上陸、数村
之民家を放火し、家財を奪ひ、耕牛を屠り、惨刻⁽⁸⁾
を相極、奈何にも侵掠残暴之振舞、乍恐

(4) 徳川慶勝(尾張藩前々藩主 征長総督)
(5) 永井尚志(大目付・戸川鉦三郎(目付・松野孫八郎(目付)
(6) 小笠原長行(老中 肥前唐津藩世子)
(7) 宍戸備後助(磯長州藩士)

天地覆戴之仁固よりケ様之御事無之は勿論二付、弥

以從來之事讒構誣罔之手に出候て、此形勢二至候義と承

知仕候故、臣子之分を尽し闕下江罷出、主人冤罪哀訴仕

度相決シ、朝廷江鄙情上表仕置、且道を隣

藩二仮り、殊ニ其御表は御出先根拠之事二付、其御役々江も書面

差出候へ共、一切御酌取も無之、却而軍勢被差向、既ニ防州小

瀬川口江御侵来相聞候故、無拠及迎戦、就中小倉藩

ニ於而は從來誣讒之次第も有之、猶小笠原屯岐守殿

九州指揮として御滞在、頻ニ諸軍御督促被致、侵入之期

限相迫候二付、是亦進入数度交戦ニ及候所、不図も自

其居城を被焚、御引揚ニ相成候二付、隣傍筑前・中津

両藩江鄙意演述致候、浜田藩之義は止戦応接も

被及候故、素より一点宿怨無之ニ付、速ニ其意ニ任候所、何故

歟一旦御城郭ヲ被火、実以驚愕之到二付、⁽¹⁾浜田侯并

因備江其次第申述候事ニ而、かゝる争戦之勢ニ相成候ては、

(1) 松平武聡(石見
浜田藩主)

地之利ニ抛り、時之宜ニ従ひ、進退攻守致候は、用兵之常

道、申も疎ニ有之、仮令進守致居候とても、決而人之土地を

侵略致候心底誓而無之候、然る処此度侵掠地引払候

様御達有之候へ共、退而熟考仕候所、乍恐真ニ

朝廷被為知召候御事ニ御座候へは、定而正邪判然公平

至当之処を以て御沙汰可被 仰出、其上にては侵掠仕ルと否

トは敝国之所置を以 御洞見も被 仰付置事、其上

暫時兵事御見合と御座候へは、唯 將軍家御喪中ヲ以

暫時御見合、数日之後再ヒ御討入と申ス事は了然相見、

是完全く讒構誣罔之余ニ出候事疑無御座、是迄士民

骸骨草野ニ暴シ、乍纔も当道之茅塞ヲ相關キ

懸候へは、此余 闕下ニ罷出、冤罪哀訴仕候期可有

之と希望仕候は、臣子之至情ニ有之、若一旦寸歩を

退き再ヒ讒構誣罔之手ニ陥り候ては、遂ニ主冤を

雪候時無之、乍恐 天日光明雲霧相開候時無之

事は有御座間敷、其節は正邪曲直判然御照臨之

御事、随而公平至当之御政典御挙行被為在候は

必然之義二付、敝国ニ於而は幾年を経候ても其時ヲ

奉待候心得ニ御座候間、何卒前段鄙衷通暢仕

候様被成下度不堪至願、依而御達之儀は尊藩御

預置被下、不悪様被取計奉頼候、以上

九月

毛利大膳家老中⁽¹⁾

廿五日

伊賀殿江芸州より申越たる書状并其事情言上、御同人も大に⁽²⁾

御当惑之趣御内話、且小拙之愚存如何と、別に御答不申、

嗚呼大政に関するにあらず、如此小事何ぞ策なからむ哉、

当時弊風除かれず又人に乏し、若強て建言せは陽に

服して陰に拒まる、唯此上は 上意の英断に応し

進退せむには然かし、我微力にして内狎邪之拒を防ぐ

こと能ハす、又いまた全く信せられざるを知る

(1) 毛利敬親(長州藩主)

(2) 板倉勝静(老中備中松山藩主)

○近江江遣せし使帰る、勝村之農は物部又左衛門と称す由、途

中まで同行せしに、其母病老之告あり、引返せりと云

廿六日 風邪引、鬱々として東歸致仕之念盛也

津田真一・西周助・市川斎宮来る、皆此地より召され

たるを以て長鯨船にて到ると云、市川は伝信機御取建

之事二関ると云、聞く、江戸にて英国江伝習十三・四人

程命せられたり、小拙か悴兼て願置きしか、其

試にも御達無之、況哉御選抜之事誰人も申者なし

と云、是其上官我を忌憚て如斯、真可怒之甚敷也、

若一朝出勤せは自分入用を以て留学成さしめむ

も豈難からむ哉、実二小吏之情態婦人之如く聊

も公平ならず、況大事二於ておや

○四郎危篤之事江戸より申来る

廿七日 昨大坂より、唐津長鯨丸を以て押て江戸行之事申来る

会藩中沢帯刀来る

(3) 津田真道(開成所教授手伝出役)

(4) 西周(開成所教授)

(5) 市川兼恭(開成所教授)

(6) 川路太郎・中村敬輔・設楽岩次郎・成瀬錠五郎・外山捨八・箕作奎吾・林桃三郎・伊東昌之助・億川一郎・安井真八郎・箕作大六・市川森三郎・杉徳次郎・岩佐源二

(7) 海舟の次男

(8) 小笠原長行

芸州江送りし長藩之書付ニ因て、愚存建白を記す、

明日閣老江呈^{せん}とす

富永一蔵^{せん}婦府二付、宅江小鹿
伝習之事申遣す

廿八日

建白情実書川勝美作守江遣し、可然は伊賀殿江差出

方を頼み遣す

三河□之藩谷口誠造、柳川藩竹島来訪、同人

国許江行候趣申聞 ○飯田律郎来る

山本覚馬来る、聞く、薩州にて関門を破し往来縦

横、鹿児島にては英人来りし哉、又英より帰国之者

共来る歟、學術伝習諸藩を教導すと云、此節

蒸気船入津にて諸家之雜説紛々、彼兵を率ひて

京師江入る、或は不羈之志あり杯可笑之評あり、然るに

薩藩は異銃武器砂糖を送り、是を嚮きて敢て

意とせず、其意を不察^{ママ}さる者彼は惑説を成すは

甚慚愧すへき也といふ

(1) 川勝広運(大目付)

(2) もと御持小筒組差図役頭取
(3) 会津藩士

廿九日

保科⁽⁴⁾彈正殿中老樋口弥一郎来る、此人我か⁽⁵⁾ 大父之知る人、
廿年を経て逢へり、嗚呼 大父若如此人ならは何之
恨かあらむ哉

奥平清記⁽⁶⁾之文通安藤脩藏持参、長之大島郡庄屋

より先日惨酷之事あり、右之返礼として松山城地江攻襲

すへき旨通せりと、故に松山⁽⁷⁾之君子恐慟不少、清記は江戸

に在て痛心に堪へず、云々を頼む由也、諸侯之愚弱成

る大旨此類また歎すへし

三宅万太夫来る、三枝氏⁽⁸⁾之用人歎願書写持参
長谷川

高崎左京来る、長州我か逢接後彼藩士之評を聞

く 越老侯⁽⁹⁾十月限ニ而帰国願濟之由、本多修理⁽¹⁰⁾

酒井十之允⁽¹¹⁾暇乞、且此後之説あり

十月朔日

晦日⁽¹²⁾ 広瀬元恭来る

先日愚存海軍局小事申上候事、御下知有之、大低

(4) 保科正益(若年寄 上総飯野藩主)
(5) 勝小吉(海舟父 嘉永三年没)

(6) 伊予松山藩家老

(7) 松平(久松)定昭(伊予松山藩世子)

(8) 芸州藩留守居

(9) 松平春嶽

(10) 越前藩家老

(11) 越前藩士

(12) 蘭学者 京都の医師

御許容、其中一・二御沙汰二難被及旨也

且歸府之事被仰渡 伊賀守殿

御用相済候間、歸府可被致候事

○近江勝村又左衛門尋来る、貧^(窮)究^(窮)ヲ憐、五拾五兩恵^(遣)す

二日

松山太夫菅五郎左衛門より来状、國中雜説紛々、長之輕輩

大島郡乱妨を憤り攻襲之雜説盛にて恐慟之由、内々

其所置を頼ミ越す、京地之留守居伊藤牛之助

使

昨日大坂留守旅宿江長谷川久三郎用人、主人御究問^(糾)

被仰渡二付、歎願書差出方懇願、大隅江可差出旨⁽²⁾

申遣す、可憐、微弱は閑せられ強剛は通ること、

誠天下之不^(分)文明、終二今日在るゆへん成る哉

三日

細川藩井口貞助・^(ママ)⁽³⁾新九郎来る、論説宜し

(1) 使番

(2) 松平信敏(大坂町奉行)

(3) 浅井新九郎(肥後藩士)

小笠原左京太夫家来二木⁽⁴⁾ 来る、小倉江鉄炮

遣し候事二付、拾人程乗組願ひ

赤松小三郎・同兄来る、雲州怯弱之説を聞く⁽⁵⁾

出殿伊賀殿より当節之情実御聞有之

上様江御直ニ海軍事并集会之上道理と情⁽⁶⁾

実と反覆考究して諫むへく、また御採用可然之

密事言上、大低御嘉納之御様子也

明朝大坂江出立、東帰之事申上

四日

大坂着

五日

大隅江行く、心裡を話す、此夜淀船行

六日

七日

八日

(4) 小笠原忠幹(豊前小倉藩主 慶応元年九月死去)

(5) 信濃上田藩士海舟門下

(6) 芦田柔太郎(上田藩士)

(7) 立花種恭(若年寄 陸奥下手渡藩主)

(8) 徳川慶喜(八月二十日宗家を相続)

九日

十日

十一日

十二日

十三日

十四日

十五日

十六日

此夜帰着

十七日

出殿、⁽¹⁾兵部殿・⁽²⁾肥後殿江海軍局伺済之事共言上

十八日 大久保一翁来訪

両日休

十九日 此日御院号被仰出、則⁽³⁾昭徳院様と追号

廿日

出殿々中太平無事、狎邪之小人頻ニ私営し、勿々とし

(1) 稲葉正巳(若年寄格 安房館山藩前藩主)

(2) 大関増裕(海軍奉行・若年寄格 下野黒羽藩主)

(3) 徳川家茂の院号

て旋幹す、又可憐

廿一日

廿二日

廿三日

廿四日 小⁽⁴⁾鹿米利堅江留学を願ふ、尤自分入用也

廿五日 柴山良介⁽⁵⁾来る

廿六日 皆出殿

杉亨造⁽⁶⁾二聞く、京都にて風評二は、此度之衆議は

五ヶ条、第一遷都之事 防長御所置之事

將軍宣下之事 小倉・浜田・津和野御所置之事

兵庫開港之事也と云

廿七日

廿八日

廿九日 復局之者被 仰付

晦日

(4) 海舟の長男

(5) 薩摩藩士

(6) 杉亨二（開成所教授 海舟門下）か

十一月朔日

御代替御礼

二日

三日 翔鶴船にて豊前殿立帰り、御帰府有之⁽¹⁾

四日

熊本藩馬渕慎助来る、聞く、近日小倉表猶小せり会

不止、京地是か為に旁議紛々^(務)

黒水泉次郎来る、御扶持方七月・十月分一紙、十一月

分一紙、御蔵二入有之と

五日

六日

七日

八日 聞く、京師にて山階宮御初大原三位之徒廿一人⁽²⁾

九日 御譴責之御事ありと云

(1) 松平(大河内)
正質(若年寄 上総
大多喜藩主)

(2) 晃親王(十月二
十七日国事御用掛を
罷免)

(3) 大原重徳

十日

十一日

室賀伊予殿江参上、内話種々あり⁽⁴⁾

十二日

十三日

十四日

羽黒侯江西洋馬具借し⁽⁵⁾^(ママ)

聞く、京師にて諸侯追々集会す、薩は病氣二付⁽⁶⁾

御断と云

十五日

十六日

十七日

十八日

十九日

廿日

(4) 室賀正容(御用御取次側衆)

(5) 大関増裕(下野黒羽藩主)

(6) 島津久光(薩摩藩主島津茂久の父)

廿一日	薩州吉井仲助来る、西国之風説を聞く
廿二日	
廿三日	
廿四日	
廿五日	富永一蔵、鈴藤勇次郎来る <small>（²）</small> <small>（¹）</small> 吉井友実（薩摩藩士）
廿六日	
廿七日	
廿八日	
廿九日	
晦日	
十二月朔日	
二日	
三日	赤沢生之事二付、酒井左衛門尉家老江談す <small>（³）</small> <small>（²）</small> 軍艦役
四日	
五日	此日長鯨丸本牧洲乗揚 <small>（³）</small> 酒井忠篤（出羽庄内藩主）

（1）吉井友実（薩摩藩士）

（2）軍艦役

（3）酒井忠篤（出羽庄内藩主）

六日

七日

八日 岡野より米代百弍拾五両、奥方持参

九日

長鯨丸本牧之洲江乗揚たるを以而、翔鶴船

江乗組出帆

十日

横浜江上岸、語学所江到る、且製鉄所一

見

十一日

長鯨引出方を指揮す、トロス切れて船少動

す

十二日

長鯨自から洲を出つ

十三日 浦賀江到り富士船・朝陽船見分

十四日 帰府

十五日 登 營 岡野より七月中用立候飯米五拾俵之代
価百貳拾五兩返金、為礼二千
八百疋差越す

本日 將軍宣下之御祝義有之、但於

京師本月五日被 濟せたるを以て也

十六日 伊藤⁽¹⁾安兵衛江金貳百兩世話いたし遣す

十七日 岡野奥方江渡し、当暮返金之積也

御浜にてフロチルレ練船肥後殿・豊前殿御

一見

卯三郎⁽²⁾江用立金証文返上し遣す

松平権十郎⁽³⁾江赤沢生寛典之所置を以て

取計呉候様頼ミ遣す

十七日

十八日

十九日

廿日

(1) 前名左源太
七月より使番

(2) 清水卯三郎

(3) 出羽庄内藩士

廿一日

廿二日

廿三日 伊藤安兵衛来訪、廿六日京師江出立、馬借用す

廿四日

廿五日

伊藤安兵衛江拳銃一挺借し遣す^(ママ)

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日

晦日

本日表坊式百人程御廃し、殿中雑踏

又、近日

主上御疱瘡御重事之聞江あり⁽⁴⁾

慶応三丁卯年

(4) 孝明天皇

正月元日

二日

三日

四日 卯三郎江七拾五兩用立遣す

本日、旧臘廿九日

主上崩御之御事ありと 仰出あり

民部⁽¹⁾太輔殿清水御相統之御事被 仰出

或云、四日兵庫より長鯨丸江御乗船、仏郎

西展観会江御出と云、兵庫頭より文通二而

知之

五日

六日

七日

八日

本日民部殿長鯨船にて横浜江御着船之風聞

(1) 徳川昭武(徳川
斉昭十八男 徳川慶
喜の弟)

あり、故に⁽²⁾壳岐殿・⁽³⁾出雲殿・⁽⁴⁾肥後殿・⁽⁵⁾滝川播磨・⁽⁶⁾小栗
上野・⁽⁷⁾赤松左京并神奈川奉行フーセン船にて出張之沙汰
あり、御船之用意先ニ申遣す

九日

本日民部殿横浜江御着船、召連らるゝ者は⁽⁹⁾山高
石見守、御小姓頭取⁽¹⁰⁾式人、奥詰⁽¹⁾五人、木村宗三、⁽¹²⁾医師
一人、外老人、総計廿六名と云

十日

会藩林三郎来る、聞く、水戸家相国寺⁽¹⁴⁾ニ旅宿する
民部殿御附大場⁽¹⁵⁾一心齋等此度之仏行不承知
也と、ゆへに俄に清水館江御相続被 仰出たる也と云

○京師は召ニ応せし諸侯皆御暇をた^(末欠カ)ハれり、

且監察輩会津を良とせず、中間説ありと

聞く、其起りは土州之乱妨人内済之事ニよれりと

○水戸家の国政二附、岩田⁽¹⁶⁾・堀之輩⁽¹⁷⁾帰府せりと

- (2) 小笠原長行(十月六日老中を罷免、十一月九日再々役)
(3) 立花種泰(若年寄)
(4) 大関増裕(海軍奉行・若年寄)
(5) 滝川具挙(大目付)
(6) 小栗忠順(勘定奉行)
(7) 赤松範清(目付)
(8) 早川久丈・水野良之
(9) 山高信離(目付より作事奉行格小姓頭取となる)
(10) 菊池平八郎(水戸藩士)と井坂泉太郎(同)
(11) 加治権三郎・皆川源吾・大井六郎左衛門・三輪端蔵・服部潤次郎(いずれも水戸藩士)
(12) 水戸藩士
(13) 高松凌雲
(14) 本圀寺の誤りか
(15) 大場一真齋(水戸藩執政)
(16) 岩田通徳(目付)
(17) 堀錠之助(同)

十一日	
十二日	
十三日	
十四日	
十五日	
十六日	
十七日	
十八日	
十九日	同役藤沢、海軍奉行並駒井転役、 ⁽¹⁾
	織田宮内海軍奉行並、池田可軒軍艦奉行 ⁽³⁾ ⁽⁴⁾
	並被 仰付
廿日	
廿一日	
廿二日	

(1) 藤沢次謙(正月十九日軍艦奉行より歩兵奉行となる)
(2) 駒井朝温(正月十九日陸軍奉行並に就任)
(3) 織田信愛(正月十九日陸軍奉行並より海軍奉行並に転任)
(4) 池田長発(もと外国奉行)の隠居名

慶応三年正月二十三日〜二月三日

(鉛筆書後筆・異筆力)
「三年
丁卯」

廿三日

廿四日

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日

二月朔日

本日和蘭公司江面談、開陽船之物勘定書⁽⁵⁾

付相渡シ、其委細を申聞ける

木下大内記を訪ふ⁽⁶⁾

二日

三日

小鹿米利堅江留学願相済

近日長州之事、

(5) ポルスブルック(オランダ総領事)

(6) 木下利義(軍艦奉行)

大行天皇崩御ニ於而、御解兵之議被 仰出⁽¹⁾

四日

五日

六日

七日 肥田・伴之両軍艦頭並被 仰付⁽²⁾⁽³⁾

林三郎来る、聞く、御解兵之事被仰出ニ因て、会藩人⁽⁴⁾

兎角不穩之説あり、また豊後群代窪田治部右⁽⁵⁾

衛門、民心不穩ニ付御呼歸し、比田は留米江天草ハ⁽⁶⁾久

肥後江御預ケと云、或は聞く、九州之小諸侯長州江

人質を入るゝの説ありと云

八日

九日

十日

庄内松平権十郎来る、高木三郎小鹿同行之事談⁽⁶⁾

し承服、決心して此挙に倍從を乞ふ⁽⁷⁾

(1) 孝明天皇

(2) 肥田浜五郎

(3) 伴鉄太郎

(4) 会津藩士

(5) 窪田鎮勝(西国

郡代)

(6) 出羽庄内藩士

海舟門下

十一日

十二日

十三日

廿四日

奥平操⁽⁷⁾一来る、聞く、小倉は薩州を介に頼ミて

長州より領地五万石を得、其他之地は皆侵奪

せられ、肥後に蟄すと云

中津領宇佐八幡江長人参宮成さむと乞ふ、中津

人恐怖して援兵を諸方に乞ふと云、可笑可歎

廿五日

(以下一八枚白紙)

(裏表紙見返し)

丙寅六月より入費大概、宅江三百五十両暮し方其外

(7) 奥平屯岐(もと豊後中津藩家老)

【「海舟日記 五」に付属する文書】

① 77～78丁目（慶応二年七月十九日～廿日条）に挟み込み

將軍薨去

長州使命

之件

② 129～130丁目（慶応三年正月十六日～二月朔日条）に挟み込み

大谷五介